


Lib.

京都産業大学図書館報
v.37, 増刊号(Dec.15, 2010)



発表！！
第6回京都産業大学図書館
書評大賞

受賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品ならびに講評	
<大賞>	4-5
<優秀賞>	6-15
<佳作>	16-35
アンケート・統計・概要	36-40

受賞者発表

第6回京都産業大学図書館書評大賞には118名123篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り受賞者が決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の50音順



大賞

氏名（学部）		書評対象図書
おかもと 岡本	ひろこ 寛子 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『夏の庭：The Friends』



優秀賞

おかべ 岡部	よしのり 義範 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『ちょんまげぷりん』
なかやま 中山	ゆき 結貴 (文化学部国際文化学科 3年次生)	『中国社会の超安定システム：「大一統」のメカニズム』
はやし 林	ゆか 佑香 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『博士の愛した数式』
やしき 屋敷	まさゆき 雅之 (経営学部 1年次生)	『白夜行』
よしだ 吉田	のぞむ 望 (経営学部経営学科 4年次生)	『くじらの墓標』



佳作

あまの 天野	るみ 瑠美 (総合生命科学部生命資源環境学科 1年次生)	『奇跡も語る者がいなければ』
いなもと 稲本	ちはる 千晴 (経営学部経営学科 3年次生)	『きよしこ』
たにぐち 谷口	ひろき 博紀 (経営学部経営学科 2年次生)	『できる人、採れてますか？：いまの面接で、「できる人」は見抜けない』
ためあき 爲明	じゅんいち 純一 (経営学部経営学科 2年次生)	『ハゴロモ』
ながさわ 長澤	もとみち 求道 (経営学部ソーシャル・マネジメント学科 4年次生)	『考具』
ななかど 七門	ちはや 千駿 (法学部法律学科 3年次生)	『星の王子さま』
はちけん 八軒	らいと 来人 (文化学部国際文化学科 3年次生)	『死神の精度』
ふじい 藤居	ゆきひろ 幸広 (経営学部経営学科 3年次生)	『沈まぬ太陽（3）御巢鷹山篇』
ふじの 藤野	しょうへい 奨平 (経営学部経営学科 2年次生)	『知的複眼思考法』
まつなが 松永	りょう 遼 (経営学部会計ファイナンス学科 2年次生)	『告白』

選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 瀬尾 美鈴

ここに、第6回図書館書評大賞入賞作品を発表できることを心から嬉しく思います。

図書館書評大賞とは、本学の学部学生が図書館蔵書から1点を選んで書評を書き、Webで応募するというものです。前回の応募者数は77名でしたが、今年は118名と増加しました。

入賞作品の選考は図書館長、図書館委員会委員（教員）5名、図書館職員5名の計11名で構成する、図書館書評大賞選考委員会によって行いました。第1回委員会は4月28日（水）に開催、募集要項や情宣活動、選考過程等々を審議し、決定しました。6月30日（水）には、劇作家坂手洋二氏を招聘して図書館書評大賞講演会を開催しました。講演会は『時代と創造性』という題目で講演され、本学学生へ「流れてきた情報を受け取るだけでなく、そこからどれが大事なのか自分から選んでいくことが大切なことです」というメッセージをいただきました。

応募総数は昨年より大幅に増加し、締切日9月30日（水）で123篇ありました。10月6日（水）開催の第2回選考委員会において、一次選考対象作品を114件としました。これは、応募要件としている文字数制限の範囲外の作品が除外されたためです。

一次選考対象作品をほぼ5等分し、教員委員と職員委員の2名一組が各自で精読し、採点を三段階（A・B・C）で行いました。結果を総合して、二次選考へと進む作品44篇を精選しました。二次選考では、11名の全委員が全44篇をあらためて熟読し、日本語表現・文体・構成・読解力・展開の仕方・独自の視点・論理的整合性・的確な意見かどうか等々、精査し採点しました。各委員の評点を合計し、点数順にリストを作成しました。11月10日（水）の第3回選考委員会では、このリストをもとに、上位16篇が点数だけでなく内容として

も入選作としてふさわしいかどうか、これ以外にも見落としや漏れがないか、慎重に討議しました。また、剽窃や盗用のないことも応募者へ再度確認しました。このような厳正な選考を経て、大賞以下の受賞作を決定するに至ったのです。

まず、この場を借りて、応募者全員にお礼申し上げます。図書館書評大賞に応募したことで、今年の夏休みが特別に意義深いものになったことを期待しています。今年の特徴は、経営学部と法学部からの応募者の増加があげられます。惜しくも入賞を逃した応募作品の多くは、入賞作品と比べても僅差でした。4年次生には今年が最後のチャンスとなりましたが、3年次生以下の応募者はこの結果に落胆せず来年もぜひ再挑戦してください。

名誉ある今年の大賞作品は、『『夏の庭』を読んだ』が選ばれました。堂々の大賞受賞でした。最初の段落でひといきに読者の心を掴むような、素晴らしい表現力と展開力のある文章に、多くの選考委員から高い評点が与えられました。

優秀賞5作品と佳作10作品は、それぞれに対象図書の魅力や価値を他の人に伝える工夫の跡が見られました。読者に本を読む気を起こさせる生き生きとした文章でした。受賞者諸君には、心よりお祝い申し上げます、その努力に敬意を表したいと思います。受賞の喜びを、ぜひ周囲の皆様と分かち合ってください。

選考にあたり、講義や研究活動でお忙しい中、ご尽力賜りました中山（法務研究科）・小池（経営学部）・高山（外国語学部）・岡田（コンピュータ理工学部）・齋藤（総合生命科学部）の教員委員、5名の図書館職員委員に感謝申し上げます。

最後になりましたが、協賛いただきました丸善株式会社・株式会社紀伊屋書店・株式会社雄松堂書店の皆様には厚く御礼申し上げます。



大賞

 おかもと ひろこ
 岡本 寛子


書名：『夏の庭：The friends』

著者：湯本香樹実

出版社・出版年：新潮社，2001

「『夏の庭』を読んで」

死ぬとはどういうことだろう。暗くて、冷たくて、何も聞こえない場所に行くような感じのことだろうか。それとも、温かな大きなゆりかごの中で眠り続けるような感じのことだろうか。誰も一度は考えたことがあるだろう。死なんてものは、それを目の当たりにした人にしか分からないものなのかもしれない。

曾祖母が亡くなった時、私は初めて死を見たのだらうと思う。体は冷たく、硬く、白く、細かった。触れることをためらった。こんなに小さい人だったのかと思った。骨を骨壺に入れた時は、もっとそう思った。それまで信じられなかったあやふやな「死」というものが、急に姿を現し、現実みを帯びてくる。真っ白な骨だけになった曾祖母の姿に、みんな泣いていた。

この作品では、「死」という言葉が実に多く出てくる。登場人物の口からは「死ぬこと」に対する率直な疑問があふれ出す。それでいて、人物描写はリアルで、躍動感があり、生き生きとしている。

何をするにも、いつも一緒の小学生3人組は、人が死ぬ瞬間を見てみたいという好奇心で、一人暮らしの老人を観察する。そのうちに老人は観察されていることに気づき、不快感を露にする。しかし、小学生たちはそんなこと気にしない。当初、彼らの目的は「人が死ぬ瞬間を見ること」であったが、そのおじいさんはなかなか死なない。それまでろくに掃除もしなかったおじいさんが、日に日に活動的になっていく。次第に、お互い観察し、観察されることが当たり前になってきて、彼らの心の触れ合いが始まる。おじいさんは小学生たちに色々な事を教えてくれる。洗濯物の干し方、花の名前、漢字の読み方、それから、命の重さ。

この作品で印象に残っている言葉がある。「だけどさ、ほんとは生きてるほうが不思議なんだよ、きっと」

「生きること」は、いつ終わるか分からない。明日かもしれない。老人は、戦争へ行って、生きるために人を殺した。そのことは、彼の人生を大きく狂わせた。「生きること」の裏側には「死ぬこと」が常に存在する。私たちの感覚が麻痺してしまっていて、当然であるように思っている事柄に疑問符を打つ台詞ではないだろうか。

本作では、終始「死」について書かれているが、登場人物たちの家庭環境などについても描写されており、それぞれの家庭に潜む問題を浮き彫りにしている。毎日帰りの遅いお父さんと、お酒に逃げるお母さんを持つ僕。外に子供を作ったお父さんと、そのことを心底恨むお母さんを持つ河辺。魚屋を営むお父さんと、その家業を継いでほしくないと思うお母さんを持つ山下。日々の生活に追われる小学生と、戦争で心に傷を負った老人。それ

それぞれには、それぞれの悩みがあって、それぞれの今を懸命に生きている。お互いの満たされない心の隙間を埋めるように、子供たちと老人との距離はますます縮まっていく。

物語が進むにつれて、小学生たちも、読者である私も、最初の目的など忘れていた。このおじいさんが死ぬ瞬間なんて見たくないと思った。おじいさんの家の庭が、夏から秋に季節を変える頃、突然の別れが訪れる。

作者は、自分の祖父を思ってこの作品を書いたという。それは、作者の中におじいさんが在り続けているということではないだろうか。様々な思い出と一緒に心に焼き付けられたその存在は、たまにしか思い出せないものかもしれないし、隅っこに追いやられたものであるかもしれない。しかし、絶対に忘れはしないもの。そして少年たちの心にも同じようにおじいさんがいるのではないか。彼らは、あの夏の庭を忘れることはないだろう。

私たちは、生きていることに何らの感情も抱かない。生きていることを意識しないし、感謝することも少ない。豊かすぎて、忘れてしまったのかもしれない。この作品は、「死」に対する純粋な疑問から始まり、さらにその答えを暗示してくれているように思う。また、少年たちの複雑に交錯する両親への感情が巧みに表現されており、さらに読者を惹きつける。生き生きと描き出された小学生たちが、私たちに投げかけているものとは何だろう。死を理解しようとするのは、霧を掴もうとするようなことかもしれない。しかし、死んでも心に在り続けるものがあることに気づくことは、そう難しくないだろう。「生きること」と「死ぬこと」、おぼろげなその姿を自分なりに考えてみてはいかがだろうか。一読の価値あり。

選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 齋藤 敏之

他の書評と比べても、明らかに高い評価を得た書評であった。文章そのもののテンポがよく、読み手に大変やさしかった。作品と書評を何度か読み直してみても、読んだ作品そのものもつ力が書評を書く側の背中を大きく後押ししているのではないかと思えた。

さて、書評の対象となった作品のテーマは「生命」と「生命の終焉」である。書評を記した学生さん（評者）にとっても身近に経験したことであった。書評は作品と同様、短い文章で構成されている。評者は「生命の終焉」のような重いテーマを扱った作品を書評する時、このような短い文章表現が有効であると気がついていったような印象を受けた。実際はどうであったろうか。

作品の中では、小学生3人組と老人との間で起こるいろいろなやりとり、小学生3人組の家庭環境、学校での出来事などが事細かく描写されているが、書評の中でも十分にその様子が伝わってくる。作品の中の文章をそのまま引用しているのではなく、評者が再構成した上で、作品を損ねることなく書評の中でくみ上げている。もっぱら小学生側から老人を観察する形をとっている作品であるが、その背景には作者の祖父への思いがあるという。実際には、評者にも曾祖母との経験を通して似たような思いがあったのだらうと思うし、それが書評の何とも言えぬ雰囲気、単なる作品紹介とは違った印象を与えているのではないだろうか。作品が扱っているテーマがテーマである。仮に好奇心があったとしても、また本の中であったにしろ、誰もが避けて通れない「生命の終焉」に対峙することは精神的に容易ではない。読み手側の力も感じる書評である。高く評価したい。敢えて言うのであれば、象徴的な表題とも思える『夏の庭』そのものにもう少し触れてほしかった。そうすると、書評を読む人に作品の良さをもっと伝えることができたように思う。

受賞者から一言



今回、このような賞をいただいたことを大変嬉しく思います。私の書評によって、少しでも多くの方々に『夏の庭』を読みたいと思っていただければ光栄です。私はこの機会に恵まれ、ただ単に本を読むことの楽しさ、何かに挑戦することの大切さを改めて感じることができました。



おかべ よしのり
岡部 義範



書名：『ちよんまげぷりん』

著者：荒木源

出版社・出版年：小学館，2010

「江戸からの贈り物」

人はごく普通に生きていくと、多かれ少なかれ「カルチャーショック」というものを体験する。一般的に、カルチャーショックとは今までにない考え方、文化、生活様式などに触れた際に受ける違和感やとまどいなどの感情を言う。では、過去の時代の人間。例えば、江戸時代の侍が現代にタイムスリップしてきて生活すると、どれ程のカルチャーショックを受けるのだろうか。この物語はそんな夢のような（実際、フィクションではあるが……）究極のカルチャーショックについて描いたものではないかと思う。

ある日、ひろ子は息子友也と共に侍の格好をした怪しげな男と出会う。この男が後に数々の騒動を引き起こす直参侍の木島安兵衛であった。彼は180年前の江戸からタイムスリップしてきたそうなのだが、当初ひろ子は半信半疑で信じなかった。しかし、彼の見事なまでの「ちよんまげ」。そして本物に違いない日本刀。さらには異質なまでの「ござる」口調。これらを見聞きする内に、彼の話が真実であると確信せざるをえなくなる。こうして、ひろ子はひょんな事から知り合ったこの侍を家に置き、江戸に帰れる日が来るまで共同生活をするようになるのだった。

だが、安兵衛は日々の暮らしの中で現代の様々な文明（自動車、テレビ、水洗トイレ、冷蔵庫など）に驚くことに。それもそのはず。私たちにとっては当たり前となっている現代の生活そのものが、江戸時代の侍にとっては想像を絶する未知との遭遇なのだから。

そんな中、徐々に現代の生活に慣れてきた安兵衛は恩返しのため家事をやることになり、最初は戸惑いつつもやがて優良主夫へと成長していく。シングルマザーであるひろ子は、家事を完璧にこなす安兵衛を見るうちに彼が自分の追い求めていた理想の夫である事に気付く。果たして彼らの関係はどう変わっていくのだろうか。こうした江戸との生活面での変化をユーモラスに描いた前半とは打って変わり、後半になると作者が本書で伝えたかった真意が見えてくる。本書は数多くある単なるタイムスリップによる喜劇を描いた作品ではない。安兵衛を通して現代人が失った心や価値観を伝える社会風刺の意味合いを持つ作品なのである。私達にとっては少々耳が痛い部分もあるのだが……。

やがて、なりゆきでテレビのコメンテーターになった安兵衛は趣味に没頭し家事を疎かにする「分」をわきまえない専業主婦、エネルギー消費を惜しみ黙って子供を放任する親、さらにはそんな彼らを擁護する評論家達を一刀両断に口撃で斬っていく。

彼の理論に同意し「安兵衛といると、自分たちが何を手にし、何を失ったのかよく分かる」というひろ子が感じたこのセリフが心に引っかかった。世の中が劇的に進歩する変わ

りに、失うものもまた大きい、そういうことなのだろうか。いや、このような小論文にも出てきそうな言葉で本書に隠されているメッセージを片付けたくない。今の世の中、たいていの人間（私も含め）は面倒な事を避けるために建て前を気にし、周囲には上辺だけの付き合いを取り繕い良好な（ように見せているだけの）関係を築いている。また他人の子供は勿論、自分の子供にさえ叱りつけ、物事の善悪を教える事を避ける。むしろ、だれかれ構わず感情の赴くまま行動する人間は現代社会に抹殺されるか相手にされないといった具合である。しかし、安兵衛の時代は違う。信念を持たずして武士は務まらず、主従・親子関係、年輩者に対する礼儀が確立した人の「心」がある時代だった。

この時、私はあることに気付いた。今までは安兵衛から見た現代の生活が究極のカルチャーショックだと思っていた。だが、実際は私達、現代人側から見た江戸時代の暮らしや、思想の方がそれに当たるのではないかと。すごい、深いな。素直にそう思った。一見ふざけたように思える本書のタイトルからは想像できない程の強いメッセージを感じた。

ところで、本書のタイトルにもなっている『ちょんまげぷりん』の「ぷりん」はどこからくるのかと思うだろうが、これは最後まで読むとわかるようになっている。この「ぷりん」が物語の鍵を握る、とまでは言わないが、少なくとも最終章には関連している。また、最後まで意外な展開が用意されているので、良い意味で読者の予想を裏切ってくれる。

そして、もう一つのテーマとして安兵衛を通し働く事の意義が描かれている。読者の楽しみを残すという意味で、ここではあえて述べないことにしたいと思う。本書は単なるタイムスリップものに留まらず、様々なメッセージがスパイスとして盛り込まれているので気になる方はぜひ、一度読んで確かめてもらいたい。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山 茂樹

一般に、小説などフィクション作品の書評を行うことは難しい。書評は書評者のその作品についての批評・評価（面白い／面白くない、読むに値する／しないなど）を他者に伝えるものであるが、とくにフィクションの場合には、これからその作品を読もうとする者の楽しみを奪わない形でそれを示さなければならないからである。また、書評は感想文ではなく、「あなたの評は間違っている」との他者からの批判可能性を有するものであろう（感想には「正しい」も「間違っている」もないが、批評にはそれがある）が、その意味での客観性を確保しつつ自己の見解を述べることに、とくにフィクション書評の場合は高い思考力を要するからである。

この書評は、「カルチャーショック」を切り口に、それに多重の意味を与えて作品を分析することで、上記の点について成功している。書評者が作品の〈メッセージ〉として示すものは、書評者自身の〈メッセージ〉（やや大げさにいえば、社会評論に通じるもの）にもなっている。かといって、生硬な文章になるわけでもなく、自分が「深いな」と思ったことを自然に他の学生に伝えようとしている。「楽しい」と書かずとも作品がとても楽しいものであることが示され、〈伝える〉気持ちが伝わる文章となっている。

もっとも、「単なるタイムスリップもの」との対比は、比較対象が不明な安易な常套手段という気がしなくもない。本作は純然たる「タイムスリップもの」であり、作者はその枠内で勝負しているという見方もあるのではないかな。

受賞者から一言



文章を書くことは昔から好きでしたが書評を書くことは初めてだったので、このような賞を頂き大変嬉しく思っております。また、今回の受賞で自信を持つことが出来たので、この経験を今後も多方面で活かしていけたらと思います。



な か や ま ゆ き
中山 結貴



書名：『中国社会的超安定システム：
「大一統」のメカニズム』

著者：金観濤，劉青峰著，
若林正丈，村田雄二郎訳

出版社・出版年：研文出版，1987

「金観濤・劉青峰著『中国社会的超安定システム：「大一統」のメカニズム』(1987)を読んで」

「中国封建社会はなぜ二千年もの長きにわたって続いたのか？」この問題は、数ある歴史問題の中で最も注目されてきたもののひとつである。

これまで、世界史上にはいくつかの統一された中央集権的封建大国が出現した。例えば、西暦八百年に樹立されたシャルルマーニュ王国や、ヨーロッパ・アジア・北アフリカにまたがるムスリム帝国。日本も七世紀に大化の改新を行い、統一された封建国家を立てた。しかし、そのどれもが短期間で崩れ、社会は分裂割拠することとなった。我が国日本のような小さな島国ですら続かなかつた封建社会が、一体なぜその何倍もの面積と人口を占める中国で二千年もの間続いたのだろうか。その原因を真に解決したのが、金観濤・劉青峰著『中国社会的超安定システム：「大一統」のメカニズム』である。

本書は、同じく金観濤と劉青峰によって執筆された『興盛与危機：論中国封建社会的超安定結構』を簡約したものである。中国封建社会の停滞の原因を分析するにあたり、経済・政治・イデオロギー（文化）のそれぞれの側面から見るとするならば、この問題はすでに研究し尽くされてしまっている。そこで著者は、三者の相互作用、相互関係から見るという大胆な手法をとった。

中国封建社会の停滞の原因は、経済・政治・イデオロギーの強力な適応状態にある。そもそも、他の封建社会が分裂割拠したのは、その多くが荘園領主経済だったため、土地間の連絡が途絶えたからだった。また、経済・政治・イデオロギー同士の均衡の乱れも社会崩壊のきっかけとなりうる。中国では、儒家の官僚に政治をさせることで、これらの問題を克服した。官僚は転任を繰り返し、土地と土地を繋ぐ連絡ネットワークとなった。それだけでなく、政治とイデオロギーを結び付ける接着剤となり、経済とのバランスを調節するという重要な役割も果たした。

しかし、この強力な適応状態は、同時に社会の脆さを生む原因にもなる。どんな社会も、長く続けば続く程腐敗は避けられない。一度官僚が腐敗すると、経済は圧迫され、「毒」は社会全体を瞬く間に侵食していく。農民は容易に「官僚機構全体」を統一の打倒目標とし、大反乱が起こる。その結果、王朝の崩壊へと繋がるというのである。

ここで読者はふと疑問に思うだろう。「中国封建社会は『超安定システム』なのではないのか」と。私も最初にこの言葉を見た時、少なからず平和的な印象を受けた。だが、本

書を読み進めれば、それは全く逆であるということに気が付く。

私はよく「世界が破滅したらどうなるのだろう」と考えることがあるが、中国国内ではまさにその状態が起こっていたのだ。農民の大反乱による「毒」への洗浄力は凄まじい。官僚の腐敗だけでなく、それまで蓄えられてきた生産力をも綺麗に洗い流し、生まれつつあった資本主義の芽を摘み取ってしまう。これにより、国民は飢え、食べられるものなら人でも食べるというような悲劇を生んだ。王朝崩壊後、国家は、家族の組織制度と儒家の官僚によって驚くべきスピードで復活する。けれども、そうして出来上がったのは、新しい制度と新しい構造を持つ社会ではなく、旧王朝の複製であった。このように、中国封建社会は、それ自体が破壊と再生を繰り返し、長期にわたって停滞する「超安定システム」なのである。著者の言う「安定」は、何の発展も変化もない不変の状態ではなかった。何度崩れてもまた同じ形におさまるといふ意味での「安定」だったのだ。

本書は非常に内容が濃く、読み始めたら最初から最後まで気を抜くことができない。これまで、歴史を学ぶにあたり、経済・政治・イデオロギーをそれぞれ別個にとらえることの方が遥かに多かった私たちにとって、それら全体の作用や関係をいきなり理解することは、正直に言ってかなり難しい。だが、本書はただ強引に説明するだけではなく、西欧や日本の封建社会と比較し、中国の歴代王朝に存在した人物・事件・制度など、多くの具体例を挙げてくれている。歴史が好きな人は、「なるほどこれはこういう関係があったのか!」と分かって、嬉しくなるかもしれない。この本は、歴史好きにはぜひ一度読んで欲しい一冊である。また、もし歴史が得意でない人も、これを読めばきっと歴史に対しての見かたが変わるだろう。「ああ、歴史はその奇跡的な繋がりに触れてこそ面白いのだ」と。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 高山 秀三

『中国社会の超安定システム』は、中国の封建社会がなぜ二千年という異例の長期にわたって継続したかを問い、考察する興味深い書物である。決して平易とはいえないその内容を、この書評は簡潔に紹介している。政治・経済・イデオロギーの強力な適応状態が社会のもろさを生むという逆説は非常に興味深いし、旧体制が破壊され、新体制が樹立されても、それが単に旧体制のコピーにすぎないというのも、考えさせられる。

歴史好きにはわくわくするような本であり、歴史が好きでない人にも現実の見方を変えてくれるような本だという意味のことをこの評者は書いているが、評者自身、本当にこの書物に触れて深い喜びを得たことがよく伝わってくる。本書が語っていることは、歴史を超えて、社会や人生のさまざまな問題の考察に適用できる考えである。中国にも社会科学にも縁の薄い私が興味をかき立てられたので、書評の目的がその本を読むことを勧めるという点にあるとすれば、その趣旨は達成されているとっていいだろう。

文章はおおむねしっかり書けているが、最初のほう、「我が国日本」は「わが日本」がふつう。最後のほう、「もし歴史が得意でない人も」の「もし」は不要。「もし」は「～ならば」や、「～であっても」などにつながるのがふつうである。

受賞者から一言



賞を頂けるとは思ってもいなかったもので、嬉しさと驚きでいっぱいです。今回初めて書評を書いてみて、ふと、小学生の頃読書感想文を嫌々書いていた自分を思い出しました。まだまだ文章は苦手ですが、楽しめたのでよかったです。有難うございました。



はやし ゆか
林 佑香



書名：『博士の愛した数式』

著者：小川洋子

出版社・出版年：新潮社，2005

「心で繋がる温かさ」

《僕の記憶は80分しかもたない》。この物語の主人公は、たった80分しか記憶がもたない博士と、家政婦の「私」、そして「私」の10歳の息子。博士はその息子のことを“ルート”と呼んだ。80分で記憶が消えてしまう博士にとって「私」は常に“初対面”の家政婦である。博士は他人と交流をとるとき、言葉の代わりに数字を持ち出す。毎朝「私」に靴のサイズや電話番号、誕生日などを聞き、それらの数字から自然と意味を見出す。そんな変わった博士と過ごす生活に、しばらくは困惑しつつも慣れていき、新しい発見の毎日を過ごしていくという、ほのぼのとした物語である。

この『博士の愛した数式』は過去に課題図書に選ばれ、映画化もされた作品であり、すでに知っている人も多いだろう。実際、数年前に私自身も読んだことがある。そのときは正直、数式の意味や込められたメッセージ性をあまり理解できず、読み流してしまった部分も多々あった。しかし、この書評を書くにあたり、少なくとも当時の私にとって、この本が強く印象に残っているのを思い出し、この機会にもう一度深く読んでみようと思い、手にとった。

ありふれた生活の中に無数にある数字。一見なんの関連性もない数字に、博士はごく自然にそれらの関係を導き出す。たとえば「私」の誕生日からくる220と博士の腕時計に刻まれた284という数字。これらは友愛数というペアであり、それぞれ約数の和がお互いの数字になるのである。このような、まるで運命かのような数字の出会いを発見したときは、大きな喜びの気持ちと爽快さが溢れ、読んでいて面白い。この本のタイトルから、数学的で難しい内容という印象を持つ人もいるかもしれないが、決してそうではない。たしかに様々な数字や数式が出てくるが、この物語に出てくる数の美しさには思わずうっとりしてしまうほどだ。自然と人間との結びつきを数字や数式ひとつで表現する。数学者とはある意味ロマンティストなのかも知れないと思わせてくれるほどである。本来、無味乾燥という印象を与える数字や数式が、正反対ともいえる“愛情”を深める役割を果たしているという点に、私は大変感心した。博士が教えてくれる数式はとてもいきいきとし、ときにはメッセージまでもが込められている。それはもはや無機質なものではなく、ひとつの意味を成すものとなる。普段、数字に対してこのような感情を持つことがなかったため、この本を読んで明らかに数字に対する視点が変わった。こういった点から、文学作品としてはもちろん、数学の神秘にも触れている点で、言い過ぎではあろうが“素晴らしい”とも思ってしまった。

ある日、ルートがりんごをむこうとした時に手を切った場面がある。その時の博士の必死さに、私は心打たれた。数字にしか興味がなかった博士の意外な一面が見られたのである。幼いルートが無条件に守る博士。素数をこよなく愛した博士が、弱いものを慈しむという、その姿がとても印象に残っている。こういったことから博士は真っ直ぐで素直な心の持ち主であることが窺われる。しかし、そんな彼は毎朝、自らが書いたメモによって80分の記憶しかないと知らされる。毎日たった一人でこれほどまでも残酷な宣告を受け続けていると思うと、本当に切なく、心から悲しい運命をいたたまれなく感じた。それでも博士が数学のことを語る時に醸し出す空気はとても暖かく、数学を芸術としてみる博士の少年のような純粋さが微笑ましく、それをやさしく受け止める「私」とルートの成長が素敵である。

無欲で不器用な人柄だった博士が、「私」とルートと過ごしていくうちに、恋人でも友人でもなく、家族愛ともまた違ったなんともいえない愛情が生まれてくる。それは大変穏やかで、温かい気持ちになる。小川洋子さんの作品は、まるで筆者が体験したことがあるかのように、こと細かい描写と現実味のある心地の良い表現で溢れていて、情景がとてもよく浮かび、すっと物語に入り込みやすい。

ラストの場面では、ルートが大人に成長した後も博士とルートは数学で繋がっているのだと感じる。ルートはしっかり博士の遺産である数学を受け継いだのだ。この作品を読み終わったあと、私は清々しく、また穏やかな気持ちに包まれた。「目につく所には姿を現わさないけれど、ちゃんと我々の心の中であって……」という博士の言葉。本当に大切なものは、目に見えなくとも心の中があれば充分なのだ。そんなことを考えさせられる作品であった。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 小池 和彰

『博士の愛した数式』は、80分の記憶しか保てない不思議な博士の日常生活が、きれいにそして自然に描かれている作品です。あまりにも自然な描写は、書評者が指摘しているように、著者小川洋子さんが実際に体験した話ではないかと思うほどです。

実生活における様々なものに対して、数字を当てはめて考える博士は、書評者が指摘しているように、ロマンティスト以外の何者でもありません。書評者は、とりわけ「私」の誕生日からくる220と博士の腕時計に刻まれた284という数字が、友愛数というペアであり、それぞれ約数の和がお互いの数字になるという例を挙げて、この作品における博士のロマンティストぶりを指摘しています。また、書評者は、一見無味乾燥な数字が、本書においては、愛情を深める役割を果たしていると説明し、そして、これまで数字に対して持っていた印象が変わり、数字に対する視点が変わってしまったことを述べています。

本書では、本当に人をおもいやることのできる愛情を持ったすばらしい人達が登場しますが、書評者は、本書を読んで、彼等の愛情に包まれたようです。『博士の愛した数式』を読み、大変穏やかな気持ちになったと書評者は述べていますし、また、書評者が書評を書く際に選んでいる言葉、「温かい」「穏やかな」「素敵」「純粋」「微笑ましい」「やさしさ」などにも、書評者が本書から受けた愛情を感じます。

受賞者から一言



今回このような賞を頂き、大変嬉しく思います。書評を書くことで、普段とは違う視点から本を読むということの大切さを学びました。これを機に、より多くの本に触れ、読書を楽しみたいと思います。この度はありがとうございました。

やしき まさゆき
屋敷 雅之

書名：『白夜行』

著者：東野圭吾

出版社・出版年：集英社，2002

「二人の生きた道」

『白夜行』は質屋の店主である桐原洋介が殺害されることから、物語が始まる。この事件を担当したのは、西布施警察署に勤める笹垣潤三である。笹垣は、ある一人の女性に目を付ける。彼女の名前は西本文代である。笹垣は彼女が質屋の客であり、経済的にも貧しいということを知り、金銭目当てで殺害したと踏んでいたが、決定的な証拠を見つけることができないでいた。さらに、捜査線上に複数の容疑者が浮かび上がり、事件解決に足踏みをしていた。結局、事件は迷宮入りすることになる。西本文代が死亡したのだ。ガス中毒による事故死であった。そして数年後、ある事件が起きる。その事件には、質屋殺しの「被害者」の息子である桐原亮司と「容疑者」の娘である西本雪穂が関わっていたのだ。その後も二人の周囲には、いくつもの悪質な事件が起こるが、何も証拠はない。二人の真実を知るたった一人の人物である笹垣は、質屋殺しから十九年、あの頃まだ小学生だった二人を追い続ける。

以上が本書の簡単なあらすじである。著者は東野圭吾であり、『白夜行』は彼の代表作である。本書はテレビドラマ化されており、2011年には映画化も決まっている。私は本書を読み終え、すぐに友人に紹介してみた。それほど感動したのだ。だが、「ページ数が多い」と言われ断られた。確かに、本書は854ページあり、長いと思うかもしれないが、読んでみれば、この長さは全く苦にならない。むしろ、この長さがあってこそ『白夜行』だと思う。私は本書を読み進めていくうちに三つの特徴を発見した。

一つ目は、地域性や登場人物の心情が鮮明に伝わってくるのだ。本書の前半は大阪が舞台になっており、登場人物や刑事の言葉には関西弁が使われている。そして舞台が東京に移れば、標準語になり、舞台の移り変わりがはっきりとわかるようになっている。また、文中には「様々な思いが嵐のように心の中に渦巻いていた」とか「心の中の何かが土足で踏み潰されたような気がした」のように、比喩が含まれた文章が多々あり、読者の想像力が一層、引き立てられていてよかった。

二つ目は、主人公が客観的に描かれているのだ。大概の小説は主人公が主体的に描かれており、行動や心情などが読者に伝わるものであるが、本書の主人公である亮司と雪穂が、それぞれ単独で行動する場面や自らの心情を表に出す場面はほとんどない。主人公を客観的に描くことによって、読者を物語に引き込む作用があると私は考える。なぜ、私がこの様な考えを持ったかというと、登場人物が事件や二人について不可解に思っていることに注目して読み解くことによって、二人の人物像が徐々に浮かび上がってくるからだ。初めは、二人のことなど何もわからない。しかし、クライマックスに近づくにつれて台頭する二人の真実。そこに、主人公

を客観的に描く理由が秘められている、と私は思う。

三つ目は、本書には、いくつかの読み方があるということだ。一つは、先に記したあらすじ通りのミステリー作品である。もう一つは、亮司と雪穂が生きた一生を追う絆の作品だ。なぜ、ミステリーから絆へと派生したのか、疑問に思うだろう。二人は、幼少時代に起きた質屋殺しで、亮司は父親を、雪穂は母親を失った。文中に「あたしの上には太陽なんかなかった」とある。続いて「でも暗くはなかった。太陽に代わるものがあったから」と。これは、雪穂の言葉である。この言葉は間違いなく本心だ、と私は思う。二人は、あの忌まわしい事件以来、誰にも頼ることなく生きていかなければならなかった。そして、いつか二人で本当の太陽の下を歩こう、という意味を示す唯一の言葉である。これは、決して深読みなどではない。本書を読み進めていくうちに、あるいは、読み終えた後に、もう一度この物語を思い返すことによって、自然と私を感じたことである。本書には、他にも読み方があると思う。本書を読み、感じ、それを探し出してほしい。

以上の三つが本書を読み進め、発見した特徴である。今回、私は『白夜行』と一対一で向き合うことによって、読書のイメージが、がらりと変わった。今まで読書をして、心の中にあるものは読み終えたという達成感が大半を占めており、時間をかけて作品と向き合うことはしなかった。だが、『白夜行』を通して、読書は会話であると知らされた。ぜひ本書を手に取り、この物語から発せられる言葉を感じ取ってほしい。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 小池 和彰

東野圭吾さんは、作品ごとに、全く違う顔を見せてくれる人気作家です。本書『白夜行』において彼の描いた世界も、それまでに出版された他の彼の作品のそれとはかなり異なるものとなっているとあってよいと思います。

この『白夜行』という作品の特徴に関して、書評者は、鋭い指摘をしています。書評者が指摘するように、本書では、舞台が大阪であれば関西弁が、そして舞台が東京であれば標準語が完璧に使われています。舞台が変わったことが、読者にはっきり伝わり、また読者に異なる情景を思い描かせてくれます。

また、本書が主人公である、亮司と雪穂の行動が客観的に描かれていくだけで、物語が進行していていることを書評者は指摘しています。この指摘は、本書の特徴を的確に捉えていると思います。確かに、本書では、主人公が主体的に描かれておらず、彼等の行動の客観的な記述があるだけなのに、しかしなぜか彼等の思いは本書からひしひしと伝わってきます。このいわば、実験的ともいえる著者の技法に関して、書評者は、うまく表現しています。

『白夜行』そのものが傑作ですが、しかしこの本の特徴を上手に捉えた書評者の読み解く力もまた見事であると思います。本書は、854 ページという長編ですが、この分量があるからこそ、この『白夜行』が成立しているという書評者の感想もすばらしい。本書と出会い、そして対話できたことの喜びを伝えたかった書評者の思いが、書評の文章から伝わってきます。『白夜行』というすばらしい作品に出会い、そしてじっくりと会話をした結果、書評者は、このすばらしい書評が書けたのだと思います。

受賞者から一言



この度は、このような賞を戴きありがとうございます。私が読書を始めたのは、この大学生活が始まってからで読書感想文も今まで碌にやってきませんでした。ですが、図書館で書評大賞のお知らせを見て、私は今年から始めた読書を何らかの形で残したいと思い、軽い気持ちで応募させていただきました。そして、このような賞を戴いた時は本当に驚きましたし、それが自信にもなりました。これを機にこれからも挑戦したいと思います。



よしだ のぞむ
吉田 望



書名：『くじらの墓標』

著者：坂手洋二

出版社・出版年：而立書房，1998

「舞台を観るように」

私自身、今まで演劇の脚本というものに接することはほとんど無かった。本書のような書籍を読むのも今回が初めてであり、本学で催された坂手洋二氏の講演に参加し、舞台の脚本に関心を抱いたのがきっかけだった。そして、坂手氏の中で本書を選んだのも、講演の中で坂手氏自身も好きであるというクジラについての話を聞き、クジラについて興味をもったからであった。

本書は、著者の坂手洋二氏が演出を手がけた舞台『くじらの墓標』のシナリオを書籍にしたものである。

職場の近くの倉庫で生活している主人公のイッカクは、婚約者のチサと近いうちに結婚することになっていたが事故のせいで延期となっていた。そこへ、イッカクの故郷から叔母のタツエがやってくる。そこでイッカクの6人の兄弟が亡くなった理由を聞かされる。イッカクの故郷は鯨漁で成り立っていたが、彼が小さい頃に上の兄弟たちは漁で村の掟を破り、そのために亡くなったのだと。イッカクがタツエ、チサ、シュウゾウ(チサの叔父)と結婚式の日取りの相談のために倉庫を離れた後、なぜか死んだはずの兄弟たちが倉庫に現れる。戻ってきたイッカクは自分の兄弟達を見て、驚き、そこで自分の兄弟達は死んだのではなく行方不明になっていたという新たな事実を知ることになる。死んだと思っていた兄弟達を目の前にして、イッカクは戸惑いを隠せない。兄弟達から事故の本当の真実、村の掟を破ったことやその後自分たちがなぜ行方不明にならざるをえなかったのかを聞かされ、更に、イッカクは困惑する。イッカクの故郷の村では、鯨漁の掟を破った家の末子を殺さなければならなかった。しかし末子の自分は生きているのだ。また、チサの過去、叔父であるシュウゾウとの関係がイッカクを悩ませる。これは自分の見ている夢なのか、それとも現実か。そして現実と夢が交じり合うようにして物語は進んでいく。

物語の後半では、兄弟達の失踪の原因となった漁の詳細が語られる。そこへ一番上の兄ナガスがクジラの姿で現れる。ナガスを仕留めようとする兄弟たち。だが、本当にナガスがクジラなのかはわからない。夢を見ているときは、それが本当に起きているかに感じるように、現実と幻想が平行して進んでいく。物語の結末では、再び兄弟達が現れて、クジラの鳴き声とともに終わりを迎える。

本書は、舞台の脚本を本にしたものであり、私が普段読んでいる小説とは異なっていた。まず、主に登場人物の会話によって物語は構成されている。次に人物の心理描写や動き、場面の詳細な記述といったものは、一般的な小説等と比べるとかなり少ない。そのため主人公たちの会話から、ストーリーを読み解いていく作業が求められる。このような読書に慣れていない私にとって本書

は、難解なものに思えた。しかし、繰り返し読むたびに、「ああ、そうか、このときこう思っていたのかもしれない」、「ここは、こういう意味じゃないのだろう」などの新しい発見があり、新鮮味を感じた。また、小説を読む際に、主人公に感情移入し、自分がその場にいるように思えることはよくあるが、本書を読んでいるときは、まるで、客席で舞台をみているような距離感を本書との間に感じた。この点が、舞台の脚本を本にした本書の一番の魅力ではないだろうか。

本書では、現実と夢(もしくは幻想)が入り混じり、物語が進んでいく。著者の『いとこ同士』や『だるまさんがころんだ』といった他の作品では場面や登場人物が次々に変わっていくのに対して、本書では物語の舞台の大半が倉庫の中に限られている。そのために夢や幻想のシーンがより強調されるのだろう。しかし、そのためなのか、読み終わった後に、それが現実の話なのか夢の話なのかがはっきりせず、すっきりとしない感じがあった。また、本書のベースは舞台の脚本であるために、登場人物の位置や、お互いの関係を理解することは、このような読書に慣れていない人にとっては難しいのではないだろうか。

著者の作品には社会的な問題が含まれている。『だるまさんがころんだ』では「地雷」について。本書においては、著者のクジラへの関心とともに「捕鯨」という社会問題について。しかし、著者はそれを作品の前面に押し出して主張するのではなく、著者独特の一癖あるユーモアを交えながら物語の中に練りこんでいく。そのユーモアにニヤッとしつつ、何か寒気のようなものを感じてしまうのは私だけではないだろう。

舞台の脚本という、馴染みのないものを読むことは、自分の読書の世界を広げてくれたと思う。その点も含め、本書をお勧めしたい。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 高山 秀三

『くじらの墓標』は、くじらという、どこか哀愁を帯びた巨大な生きものへの愛情がこもった、詩情あふれる戯曲である。この書評が指摘するように、話の内容は現実と幻想が交錯し、どこからどこまでが現実なのか、はっきりしないのだが、そのわかりにくさがまた文学的な魅力になっている。本来は舞台上で上演されるために書かれた脚本だが、読み物として読んでもなかなか味わい深い。ただ、登場人物が多く、舞台ならさほど抵抗なく見ることができるにちがいないものも、活字だと誰が誰か、再確認しないと気がすまなくなるのでなかなか読むのに骨が折れる。その点はこの書評の書き手が指摘するとおりなのだが、感想の半分近くが戯曲というものの読みにくさに集中しているのは、本を紹介するという点からは問題である。

この本で初めて戯曲というものを読んだこの評者は、戯曲というものそれ自体が読みにくいものだと考えたようだが、それは誤解である。戯曲にも大変読みやすいものがあり、この書物の読みにくさは、登場人物の多さをはじめとする作品の性格に負うところが大きい。この作品にしても、先に舞台を見てから脚本を読むと、わかりやすいだけでなく、舞台ではじっくり味わうことができなかつたことがよく味わえるだろう。『くじらの墓標』に限らず、戯曲一般を読むことに慣れようとするなら、まず舞台を見てから読むことをお勧めしたい。

読書は現実でなかなか味わうことができないさまざまな経験をさせてくれる。戯曲を初めて読んだことで得た新鮮な体験を語るこの書評は、そうした読書の原点にある喜びを伝えている。文章はたまに誤字や不適切な言葉遣いがあるが、気取りがなく、好感がもてる。

※編集部注 本文中の誤字は修正しています。

受賞者から一言



今回入賞できたことを大変嬉しく思っています。来年も応募できないのは残念ですが、これからも、新しい本との出会いを楽しみにしながら自分の文章力を鍛えていこうと思います。本当にありがとうございました。



佳作

あまのるみ
天野 瑠美



書名：『奇跡も語る者がいなければ』

著者：ジョン・マグレガー著，真野泰訳

出版社・出版年：新潮社，2004

「『奇跡』：もう1人の主人公」

奇跡について話をしよう。

奇跡というのは恥ずかしがり屋で、すぐに姿を隠そうとする。「偶然」という別のものに形を変えてしまう。だから私たちは、自ら奇跡を探さなければならない。擬態し、姿を隠した奇跡を見つけ出し、誰かに語らなければならない。そうしなければ、奇跡は奇跡として存在することはできないのだ。

では、一体どこから奇跡を探し出すのか？

日常だ。

世界は奇跡であふれている。もちろん、私のまわりにも。言ってしまえば、あなたがこの文章を読んでいるこの瞬間もめぐりあわせ、一種の奇跡なのだ。そして、私がこの本を手にとったことも、立派な奇跡と言えるだろう。

物語の舞台になるのは、イングランド北部の「とある通り」と、その通りに住んでいた主人公の3年後の生活。日常風景だけを書き表した作品だが、その中にも奇跡はたくさん隠されている。

まずは、主人公の妊娠だ。妊娠とは、命を授かること。命の奇跡。それだけでも十分なほど奇跡といえるのだが、主人公は双子を授かった。

主人公は妊娠しているが、胎児たちの父親となるべき男性の名も、連絡先も知らない。たとえその男性を見つけ出すことができたとしても、主人公自身は結婚をする気はない。むしろ会いたくはないと思っている。

そんな3年後の生活の中で、主人公はある人物と巡り会う。その人物とは、「とある通り」に住んでいた頃、主人公に好意を抱いていた男性の双子の弟。彼は兄からの手紙で主人公の話を何度も聞かされるうちに主人公に興味をもち、一度会ってみようとして心に決めていた。決して下心があったわけではない。兄が好きになった人物に会ってみたい。ただそれだけだったのだ。

しかし主人公はその弟に少しずつ惹かれていき、弟も自分の感情の変化に気付いてはいるが、兄への後ろめたさゆえに気持ちを明かすことができない。何とも奇妙なラブストーリーは、きっと奇跡のいたずらだろう。奇跡は恥ずかしさのあまり、「偶然」に擬態するだけでは足りず、自分ではなく二人の恋の行方にスポットライトがあたるように仕向けてしまったのだ。

物語の最後に最大の奇跡が登場するのだが、それはあなた自身で確かめてほしい。3年前、「とある通り」で交通事故に遭い、心肺停止となった男の子はどうなったのか。現在は世界中を旅しているという、主人公に好意を寄せていた男性は、今、どこで、何をしているのか。そのすべてが明かされる。最後の奇跡は逃げも隠れもしない。恥ずかしがらず、私たちの前に堂々と姿を現す。その心意気を正面から受け止めてあげてほしい。

この物語には35人ほどの人物が登場するが、そのうちの数名にしか名前とは与えられない。「ドライアイの男の子」や、「ヘアバンドの女の子」というように抽象的に表すことは、近所に住んでいる人の名前すら知らないことの多い現代の生活に関連付けることに一役買っている。登場人物の中で、嫌な話から話題を変えるとき、「あのさ、もう、なんか別のこと話さない」と言うのは1人ではないし、手の甲を叩く癖があるのも1人ではなく、パキスタン系の住人も一家族ではない。たとえ相手の名前すら知らなくても、共通点は誰にでもあるのだ。そう、何らかの形で、人は誰かと、そして世界と繋がっているのだ。これもある種の奇跡だと私は思う。

この作品のタイトル、『奇跡も語る者がいなければ』は、「とある通り」の住人の1人である男性が、自分の幼い娘に語ったことの一部だ。

「奇跡も語る者がいなければ、どうしてそれを奇跡と呼ぶことができるだろう」

まったくもってそのとおりで。語られなければ、奇跡はただの偶然として終わってしまう。

広辞苑によると、奇跡とは「常識では考えられない神秘的な出来事」。

誰かが気づき語らなければ、何事も神秘的ではなくなってしまう。私はその神秘的な輝きが失われてしまうことが恐ろしく、そしてもったいなく感じる。だからこそ気付いてほしい。日常に隠された奇跡に。私たちが語ることで、奇跡は奇跡として存在するだけでなく、輝きすらも発するのだ。逆に言えば、誰かに見つけてもらわなければ奇跡は姿を現さず、神秘的なものではなくなる。あまりにも儂い。だからこそ美しい。

ああ、奇跡とはなんて素晴らしいのだろう！

このことを理解してくれたのなら、ぜひ、日常に隠れてしまった奇跡を探し出してほしい。ただし、注意することがひとつある。世界には、もともと偶然として生まれたものもあるからだ。

では、どうやって区別すればいいのか？

あなたの感動の大きさだ。

生まれながらに偶然なのか、奇跡がかくれんぼをした産物なのか、それを判断するのはあなた自身だ。「すごい」という気持ちが小さければ偶然、大きければ奇跡。実に簡単だろう？個人差があるのが欠点ではあるのだが。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山 茂樹

この書評は、対象作品を、あらゆる日常に隠れた「奇跡」を誰かが見つけ、「奇跡」が「奇跡」として語られることの素晴らしさを描いたものとして理解し、評者が共感するその素晴らしさについて「あなた」に語りかけている。語りかけの文体が効果的に用いられ、評者の「奇跡」的な出会いの感動と思い入れが伝わってくる。また、「奇跡」の擬人化の工夫によって、作品の妙味がうまく示されている。作品における「奇跡」の性格に関する文学的仕掛けについての評価も的確である。

他方で、若干の誤字が見られるほか、評者の思い入れが強くあらわれすぎて、ややひとりよがりな読者がついていきにくい文章になっているとの評価もありうるだろう。作品の評を離れて示されたと思われる独自の見解には、賛否がありうる。

個人的には、わたしはこの書評によって対象作品を読む気にさせられた。僥倖を喜ぶたい。

※編集部注 本文中の誤字は修正しています。

受賞者から一言



書評大賞については夏休み前のある講義で先生に紹介されるまで知らず、自分の好奇心のままに応募させていただきました。初挑戦で賞をいただくことができ、たいへん嬉しく思っています。評価して下さった選考委員の方々、そして、書評大賞を紹介して下さった先生に心からお礼申し上げます。ありがとうございます。



佳作

いなもと ちはる
稲本 千晴



書名：『きよしこ』

著者：重松清

出版社・出版年：新潮社，2005

「『きよしこ』を読んで」

いったい、どれほどの人が思ったことを相手に伝えているだろう。そして、どれほどの人が実感しているだろう。いつか、ではなくいま思ったことをいま伝えることの大切さ、伝えられるありがたさを。

うまく言葉が喋ることができずにつっかえてしまう、無理に喋ると言葉がどもってしまう吃音という障害がある。この本は吃音の息子を持つある母親が、著者に「息子を励ましてほしい。」という手紙をきっかけに書かれた作品である。実は著者自身も吃音という障害を抱えながら少年時代を送った経験者であり、この作品では少年から青年時代についての成長と様々な印象的な人との出会いが短編でつづられている。

私はかつて高校時代にこの作品を読んだことがあり、メールなどに頼らず、いま伝えられることは自分の言葉できちんと伝えようと強く思った。そして、それから時間が経った現在、再び私がこの作品を手にしたのには特別な理由がある。単に懐かしかったからという理由だけではない。実は、私自身もうまく声が出ない、出づらいという不自由な経験を一時期だけが経験したのだ。その時にこの『きよしこ』という作品を思い出し、改めてこの作品を読みたい、「きよし」に、「きよしこ」に改めて会いたいと思ったのである。

この作品の中で主人公のきよしやその他の登場人物のほとんどは実在の人物なのだが、唯一「きよしこ」という空想の人物が登場する。その「きよしこ」と「きよし」の出会いはとても印象的である。あるクリスマスの日の夜に二人は出会う。その日、きよしは吃音のせいであらかかわれ、欲しかったプレゼントとは違うプレゼントを貰ったにもかかわらず何も言えずに何とも言えないもどかしさで大泣きしていた。きよしはきっと、吃音さえなければからかわれる事もなく欲しいプレゼントもちゃんと貰えていたはずだ、なんで吃音なのだ、なんで僕が、などと思っていたのではないかと私は感じた。そんな日に、きよしこはやってきた。そもそもきよしこはきよしの勘違いで生まれた空想の人物である。「きよしこの夜」という歌を幼いきよしは「“きよしこ “の夜”と勘違いして、きよしこという人物の存在がいると思い込んでいたのだ。その勘違いで生まれたきよしこは、涙を流すきよしの前に現れて、こういった。

——「君のほんとうに伝えたいことだったら……伝わるよ、きっと」

この言葉できよしの心はどれほど救われただろう。きよしだけでなく、同じように吃音を抱える人ももちろん、吃音を抱えていないほとんどの人にも経験があるのではないだろうか。誰しも、いつもうまく心の思いを言えるわけではなく、伝えられないもどかしさを感じ

じたことがあるはずだ。そして、このセリフによって心のどこかにあるそういった伝えられない、うまく伝わらない気持ちに対してどこか救われた気持ちになるのではないだろうか。

この作品を初めて読んだ時の私は、きよしはとても悲しかっただろうし、吃音なんてなければきよしはもっと幸せに少年時代を送れただろうとかわいそうに思った。しかし実際に声が出ない経験をしたことによってこの作品に対しても見方が少し変わったように思う。果たしてきよしは幸せではなかったかと言えば、違いただろうと感じたのだ。きよしは吃音によって気持ちを伝えられない悔しさは経験しても、それが悲しい事だとは思っていないのではないか。そして何よりうまく伝えられない吃音のハンデによって、伝えられる時に伝えることの大切さや嬉しさを誰よりも感じられたのではないだろうか。“普通”のことをありがたいと気付けるきっかけを吃音によって他の人よりも知ることができただろう。

それに、きよしは決して一人ぼっちではなかった。吃音を中傷してくる人は居るといえども、それ以上にきよしを慕い、守ってくれる友人はたくさんいた。そして一番の理解者である「きよしこ」がいつもきよしを見守り、励ましてくれていた。どんなに辛くともきよしこの言葉を思い出すとまた強く前へ進み出す勇気となり、幼いきよしにとって何よりも心強い存在になったに違いない。

そして「きよしこ」はきよしの前にだけ現れる存在ではなく、いつもどこでも誰のところにでも現れて気持ちを伝える勇気を届けてくれているのではないだろうか。どこかできよしこは見守ってくれている、そう考えると勇気が湧いてくる。うまく話せるかどうかではなく、「ほんとうに伝えたいことだったら伝わる」のだ。心から願えばきっと伝わる。伝えられることのすばらしさを実感できる。この作品はそういった勇気と、当たり前に行っていることをありがたいと感じるきっかけを与えてくれる作品である。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 高山 秀三

この小説の主人公きよしは吃音というハンディをもつ少年である。主人公は学校生活のなかで、吃音ゆえに苦しみ、悲しい思いをたくさんする。しかし、こうした試練は主人公を深くものを感じ、考える人間にしていく。ハンディを抱えて生きることは大変つらいことであるが、それは一面でこころを育てる豊かな土壌となる。

吃音の経験がものを伝えることの大切さを教え、表現する力を鍛えるのである。吃音に限らず、障害をもって生きるということはなまやさしいことではないが、それが何か大切なことを教えてくれるということはたしかにあるだろう。この書評はそのことを伝えようとしている。この書評の書き手はみずからも一時的ではあるが吃音になったことがあり、それが主人公きよしに共感する大きなベースになっている。書き手のつよい思いが伝わってくる印象的な書評である。

受賞者から一言



自分が京都産業大学に通っている証として何か残したいという思いが応募のきっかけです。「応募しなければ入賞もしない」ということは当たり前のことですが、なかなか行動に移せず今まで機会を逃していました。今回初めて応募し、入賞してとても驚きましたが、今後の就職活動においても積極的に自ら一歩踏み出す勇気を持ち取り組みたいです。



佳作

 たにぐち ひろき
 谷口 博紀

 書名：『できる人、採れてますか? :
いまの面接で、「できる人」は見抜けない』

著者：川上真史，齋藤亮三

出版社・出版年：弘文堂，2004

「できる人、採れてますか？」

第二の就職氷河期と言われている今日、毎日のように「新卒学生採用率カット」「新卒学生の就職難が続く」「新卒採用を見送る」といった報道が私たちの生活の中にあふれている。来年に控えた就職活動のことを考えるとこの状況を不安視している同学年は少なくないはずだ。そんな中でこの本は私たちにも企業側にも新しい採用の視点を提供したものである。

この著書では企業側にできる人材の見抜き方について論述されている。企業側にとって新卒学生採用でもっとも重要なのは十年後に必要な人材を採ることである。その新卒学生採用では「アメーバ増殖可能な人材」、いわゆるハイパフォーマーである。結果を出し、自己増殖できる人材を採ればよい。しかし、数多くの新卒学生の中からこのような人物を見つけることはかなり困難である。これを実現させるために行うのがコンピテンシー採用である。これまでの新卒学生採用では「優秀さ」がその人の評価の軸であった。ただし、「優秀さ」というのはあいまいでブレやすいものである。そこで企業側は新たに「コンピテンシー面接」を行えばよい。コンピテンシー面接とは簡単にいえば、その人物の行動事実を述べてもらい、そこから行動事実のレベルの高い人材を採用すれば、十年後の企業の中核を担う人材を確保することが出来る。

コンピテンシー面接ではこれからの希望、意欲、将来設計などの意見を聞くのではなく、過去に自分が経験、体験した事実を聞き出す。ただの行動事実ではなく、5W1Hを駆使して行動を確認する。確かに事細かく具体的に事実を確認することで信憑性は高くなる。しかも実際に内容のある行動事実がある人は具体的に話を聞かれてもはっきりと覚えている。過去の事実は変わることがない。それを聞き出すのが新しい視点である。企業としては意欲や誠意のような確実ではない情報よりもはっきりと裏付けがある事実を聞くことが今は必要である。現在の企業の状況を考えれば、これから長く雇っていかねばならないなかで採用の段階でつまづくわけにはいかない。採用は投資である。企業側は「量より質」を重視している。その質とは将来にも成果を生み出す可能性が高い人材のことである。

コンピテンシー面接で学生としてのさまざまな活動のなかから PDCA のセルフマネジメントを行い、将来にも成果を生み出す可能性の高さが測定できる。PDCA とは Plan (計画) → Do (実行) → Check (確認) → Action (改善) のことである。これらのサイクルを自ら繰

り返すことにより、自分でコンピテンシー能力を高めることが出来る。

現在、企業が求める人材像として主体性が求められている。自ら問題提起し、解決への行動を起こせる人物である。自分から積極的に仕事に取り組んでいることだけが主体性ではない。内容も大事だが企業は結果を求めている。だから、即戦力は重宝される。しかし、現状では新卒生から即戦力を選び抜ける可能性は限りなく低い。即戦力は50人に1人と言われているからである。コンピテンシー能力がある人材は主体性も高い。主体性は積極的に取り組むチャレンジ精神と行動力があることとともに結果を出すことも求められているのではないだろうか。現在は新卒学生を採用すれば、国から補助金が支援されるなど、国全体としても新卒学生の採用を増やそうという行動が起こっている。

他にも計画力のある人材も求めている。現状を客観的に分析できる力を持ち、成功までのプロセスを長期的な視野で細かく計画することができる人材である。コンピテンシー面接は精度が高く、将来に向けた投資価値のある人材を見抜くための優れた方法である。

この著者はこの本は「就活対策本ではない」と言っている。しかし、今の私が読んでも来年からの就職活動に役立つだろう。コンピテンシーを理解し、今からさまざまな経験を積むことが自分のためにもなり、社会のためにもなる。人材力の向上が今の日本には欠かせないと感じた。事実がその人の全てを語る。まずは自分が出してきた結果から自分を見直してみることがよいのではないだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 齋藤 敏之

本書評では、人材を採用する際に採用側がいかに応募者を評価するか、この難しい課題をひも解くコンピテンシー手法に関する本について紹介・批評している。書評の中では平易な文章表現を随所にみることができ、非常に読みやすかった。この点は評価したい。ただ、要約に流れる傾向が強かったのが残念である。この本は一見、実務的な本にみえるが、人を評価するという深遠なテーマを扱っている。この点をもう少しくみ取ってほしかった。書評の中では、本の著者が後半で触れているストレス対処力、共生力等を念頭においた文章が見当たらなかった。これらの項目を含めた書評であれば、もっと優れた評価を得たようにも思う。著者は人の弱いところを認めつつ、それを乗り越えていく力を評価する手法をも述べているばかりでなく、仕事をこなしていく上での処方箋を行間に暗示している。一度と言わず、何度も読み返してもらえればと思う。

受賞者から一言



「どうせ書くなら入賞を狙って書こう！」と決めて書きましたが、まさか本当に賞を頂けるとは思いませんでした。入賞の知らせを聞いたときは嬉しかったです。今後も本を読むことを継続していきたいと思います。



佳作

ためあき じゅんいち
 爲明 純一



書名：『ハゴロモ』

著者：よしもとばなな

出版社・出版年：新潮社，2006

「『ハゴロモ』」

日々の暮らしのなかで困難や予想外の出来事が生じたとき、故郷に思いを寄せることはあるだろうか。生まれ育った家庭が転勤族の僕は、ふるさとというと複数の地がまぶたに浮かぶ。そのどの地も大切な時間を過ごしたかけがえのない場所だ。物語は主人公の「ほたる」が長年にわたる恋愛に敗れ、傷をいやすべく故郷へかえることから始まる。至る所に川の流れをたたえるその故郷。そこで見覚えのある赤いダウンジャケットの男、「みつるくん」に出会う。しかし彼女はどこで、何がきっかけで彼を知ったのかを知らない。人に癒され本来の自分を取り戻し、自らの親を救ってくれた恩人の子孫に、時を越えて手を差し伸べながら物語は進んでゆく。そう、すべては循環している。人や街も互いに影響しあいながら、ゆるやかにその色を変えるように。

主人公の過去の恋愛関係について語ると、実は愛人として年月を過ごしていたのだ。相手の男性には妻子があり、到底妻以外の人との恋愛なんて許されない。ふつうそのような本であれば嫌悪感を抱いてしまうが、よしもとばななの手にかかれば、後味の悪さを残すことなく読み進めてしまう。その後も主人公の祖母が趣味で開いている喫茶店で、客にふるまわれるチーズケーキとおでん、店の半分が祖母の趣味である蘭の鉢植えで満たされていることなど、ある種田舎を象徴するような光景をひしひしとを感じるが、何か納得するものがあるだろう。

この話の中にはいくつかの展開があるが、心揺るがず情熱的な、人生観が大きく変わるといったものではない。だが本文の中に「祖父と手をつないでいると、空と地面がぐんと近くなって、手に汗をかいた。」という部分があり、なぜか僕の目にとまった。「子供だがもうかなり大きかった」「ほたる」は、つないだその手を多少恥ずかしくも思ったが、決して離すことはなかった。交通事故で母親を早くに亡くし、男手ひとつで育てられた子供が、接するひと一人一人を正面から受け止め、瞬く間に過ぎてゆく一瞬の刹那をいとおしむ姿に切なさや感銘を覚えた。普段気にとめることもない、声にならない想いをこの小説はできるだけやさしく、しかし確実に感じさせる。繊細でおとなしくありながら、後悔の残らぬよう考えて動くその姿勢は、自分自身が今までどのように生きてきたかをふり返させるものだった。行動の中に込める想いやその方法、考え方は人の個性により変わってくる。しかし誰もその想いを礎に、何らかの動きをとることがあるだろう。以心伝心という言葉

葉があるように、言葉がなくてもわかりあえることもあるのだろうと思う。しかし現実の世界では言葉や文字として表出化しない想いを、相手に伝えることは難しい。状況にもよるが、皆も相手に対して何か想いがあるならば伝えてほしいと強く願う。

生死にかかわるほどではないが心に傷を抱えた者同士が、不思議な縁で結ばれてゆくこの物語。奇しくも「ほたる」の母親と同じく交通事故で父親を失った「みつるくん」。彼の父の乗ったバスの運転手が、無理心中を凶ったのだ。悲しい出来事からまだあまり時を経ていないため、彼や彼の母親の傷は深く、特に母親は不慮の事故に巻き込まれたとはいえ、夫を無理にでも引き止められなかった自分を強く責め、体も動かさないほど弱っていた。そんな母の「心のリハビリ」のため、スキーのインストラクターの仕事を休み、年内は母に寄り添うことに専念する「みつるくん」。少しずつ「ほたる」が二人に寄り添っていったこともあり、徐々に「みつるくん」の母親は回復の兆しを見せる。

この場面では我々が時代の変化と共に忘れかけていた支え合いの精神がメッセージの一つとして組み込まれているのではないだろうか。個人と個人のつながりが希薄化し、そして淡泊になりつつある日本。企業が都市に集中し地方の雇用が減少すること、特に大企業の場合は転勤が必要になり一カ所に定住できないことから核家族化が促進され、ますます他者との関わりが変化している現状への警告もそのメッセージの一つであるように思う。

読書が苦手な僕が唯一時を忘れてその物語に浸れる、よしもとばななさんの作品たち。多少過激なことも一喜一憂せず、流れるように読者の中に浸透させてしまう彼女の技量は計り知れない。何かで心が疲れた時、きっとこの本はあなたの心を優しく包みこんでくれるはず。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 小池 和彰

書評者は単に、ストーリーの要約を提供しているのではなく、消化して、自分にあてはめて書評を書いているところが、すばらしい。特に登場人物の心情を上手に自分の言葉で表現していて、書評者の表現力のすばらしさに感心しました。書評者の独自の説明により、ストーリーがわかりやすい形で伝わってきますし、また書評者自身の心情もよく伝わってくる気がしました。時を忘れてよしもとばななさんの作品に浸っているという書評者だからこそ、ここまで消化した書評が書けたのだと思います。

書評者は、本書には、かつて日本人が持っていた支え合いの精神がメッセージとしてこめられていると解釈しています。書評者によれば、個人と個人のつながりが希薄化し、他者とのかわりを持たないわが国の現状に対する警告というメッセージが本書にはあるといます。この書評者の観点も非常に興味深いものがあります。

受賞者から一言

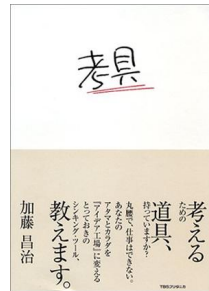


何かに疲れた時ずっと心の隙間を埋めてくれる、そんな吉本ばななさんの作品が僕は大好きです。今回の書評大賞を通じて、複数の人にばななさんの作品を手にとってもらえるきっかけとなれば幸せです。本好きの姉の横にしながらあまり本に触れることのなかった僕が、このような賞を頂けること、嬉しくおもいます。これからも文章に触れていくことできれいな文章を書けるようになりたいです。



佳作

ながさわ もとみち
長澤 求道



書名：『考具』

著者：加藤昌治

出版社・出版年：ティビーエス・ブリタニカ、
(阪急コミュニケーションズ)
2003

「『create』する人へ。」

「 $3692 \times 4728 = ?$ 」という数式を考えてみる。そろばん有段者でもなければインド人でもない、脳内でパパッと暗算、というわけにはいかない。一般的に言えば筆算で考えるのかもしれないが、もう少し原始的に考えてみる。3692人が4728個ずつ林檎を持ち寄ると全部でいくつになるか。「掛け算」という道具をもっている人ならば簡単な問題だが、もしそれをもっていなかったらとたんに難しくなる。人類は社会の様々な物事を解決する為に、こういった道具を作り上げてきた。しかしクリエイティブ業界ではそういった道具が未整備のままである。企画を立案する為の道具、つまり考える為の道具、それが考具であり、それを提案、解説しているのが本書である。

本書の前提として、「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」という言葉がある。これはジェームス・W・ヤングの著書『アイデアの作り方』の言葉であり、本書内でも何度も引用されている。まったく新しい要素を見付けるといのは途方もなく難しく、長い時間を研究に費やした人間にのみ与えられる特権のようにさえ思える。一方で「既存の要素の新しい組み合わせ」というのは誰にでも出来るのではないか。一見、世の中では新しいものばかり褒め称えられる風潮があるように見える。しかし、ナチュラルな感じのファッション、カメラ、ボブカット、女の子という「既存の要素」を「組み合わせ」て森ガールとなり、大きく流行したことがヤングの言葉の証明と言える。アイデアに求められるのは、長い時間でも研究でもなく、「既存の要素」を「組み合わせ」てみることである。この組み合わせ(=アイデア)を洗練する事で企画となる。この工程を手助けするのが考具である。

本書では、21の考具を提案しており、「情報が頭に入ってくる考具」「アイデアが広がる考具」「アイデアを企画に収束させる考具」の三段階に分けている。

一つ目の「情報が頭に入ってくる考具」は、ヤングの言葉でいうところの「既存の要素」を集める為の考具である。情報は本や新聞を読む事で得られるが、そういったものからの情報は本人の趣味や興味によって偏りが生じる事がある。野球が好きな人には野球の情報が集まるだろうし、政治家になりたい人には政治の情報が集まるだろう。そういった偏りから脱する為の考具としてカラーバス等が紹介されている。ランダムに情報を集める事で、多種多様な「要素」をもてる。もっている「要素」が多いほど多くの組み合わせ(=アイデア)が出来るので、「要素」は多くもっているほうが良い。

二つ目の「アイデアが広がる考具」は「要素」を「組み合わせ」る考具である。ここで

著者は、見当外れなアイデアであろうと思いついたものから書き置いておく事を勧めている。「拡がる」と表現しているのはこの事で、この段階ではアイデアを出すだけ出して、拡がるだけ拡がるようにする事が重要である。前段階で集まった「要素」を「組み合わせ」るマンダラートやマインドマップといった方法を提案しているのだが、どれほどの外れでも拡がったアイデアを削るのは次の段階である。

第三段階は「アイデアを企画に収束させる考具」で、事例を用いたケーススタディを行いながら、企画を形にする考具の説明をしている。この段階は非常に実用的だと思えるが、だからこそ学生の私には少し興味をもち辛いとも言えた。

上記の通り、本書は様々な考具の提案・解説をしているが、その前提には上にも書いたようにヤングの言葉がある。言うなれば『アイデアの作り方』の子供のようなものだが、兄のような存在もいる。ジャック・フォスター著『アイデアのヒント』である。参考文献にも書いているようにこの二冊を基に本書は書かれたようだが、枝葉は増えたものの、この二冊の延長線上から抜け出せていないようにも思えた。

一方でこの本で最も優れていると思った点は、図を使った説明でも理解しやすい口語調（これらも優れてはいるのだが）でもなく、挟み込まれた紙である。それには「立ち読みしてくれたアナタ、ありがとう！」と大きく書かれており、軽い目次が書かれている。気遣いを感じられて読んでいて気持ちが良かったし、気が利いてる！とクスリと笑える。

読んだ後に「クリエイティブという言葉は人は大げさな事のように言うが、意外とそれほど難しいことではない」といった印象を受けた。「create」という言葉を日本語訳すると、「創造する」なんていう神様みたいな仰々しい言葉になるが、本書に沿って訳せば「思い出す」くらいの身近な言葉になる。締めめの文章として、「企画屋さん、アイデアマンがどんどん出現してくれることを夢見ています」と書いている。創造する人になるのはなかなか難しそうだが、思い出す人になら今すぐにでもなれそうな気がする。

選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 岡田 憲志

書評者は、最初に「かけ算」というなじみの深い道具を持ち出して、自分の言葉で「適切な道具がなければ不便でしょう」と説明し、「考具」というアイデア実現のための提案本の書評の入り口としています。そして内容のエッセンスを、この本の背景となっている2冊の本を引き合いに出しながら要領よくまとめています。オヤツと思ったのは、少し辛口になっていた書評者が、本に挟まれていた立ち読み者へのメッセージのしおりを、この本の実践ととらえ共感を示しているところでした。

私たち研究や教育に携わっている誰もが、アイデアを絞り出しそれを実現するための方法を一つか二つは持っていますが、この本のように「考具」として系統的にまとめて易しく例を示してもらえばその方法の位置づけがわかり納得できます。学生の皆さんも卒業論文やプレゼンテーションの構成、就職活動の種々の資料を作る前に一度読んでみるのも有りかなと思いました。

受賞者から一言



受賞は素直にうれしいのですが、一緒に応募した友達が優秀賞を頂いていて、おめでたいようなくやしいような、複雑な気持ちです。でも僕は2年連続で入賞出来たのでイーブンぐらいじゃないかなと思っておきます。けどお互い4回生で勝ち逃げされると思うとやっぱりくやしいです。5年目に挑戦しようかな(うそ)。この度はありがとうございました。



佳作

な な か ど ち は や
七門 千駿



書名：『星の王子さま』

著者：サン=テグジュペリ [著]，河野万里子訳
出版社・出版年：新潮社，2006

「自分の搜索」

「おとなだって、はじめはみんな子どもだったのだから。(でもそれを忘れずにいる人は、ほとんどいない。)」初めのページを開いた時、この文に目が釘付けになった。二十歳になり、大人にまた一步近づいた私の、心のドアを叩く音が聞こえた。この作品は、とある星の王子さまが、いくつかの星を旅し、最後に地球で主人公に会い、王子さまの旅の話聞いた主人公が、大切なことに気づく、という内容だ。王子さまが旅する星には、個性的な人々が登場し、王子さまと面白く、時には子供っぽいとも、とれる会話を繰り広げる。ひとりぼっちの王様、大物きどりの男、酒びたりの男や、自分を有能だと思ふ実業家、はたまたガスの点灯人や、全く机を離れない地理学者まで登場し、なかなか飽きさせてくれない。彼らは、それぞれ異なる考えを持ち、自分が正しいと信じている。読み進むと、大人が、子供の頃とは比べ物にならないくらい、変わってしまうイメージが、心にくっきりと浮かび上がる。

世界を見ると、多くの人が社会に出て、大人が作った社会のルールに合わせた考えを、持つようになる。お金を稼ぎ、富と名誉を勝ち取り、権力を持つことが大切なことだと考えるようになる。子供のままでは、生きづらいから。そのうちに、子供の時に大切だったことは忘れてしまう。「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」これは、この本の中に登場する一匹の狐の言葉である。そして、私が一番好きな言葉でもある。たいせつなことについて考えたことはないだろうか。私は、どれが本当にたいせつなのか、と考えることがよくある。考えすぎて、目の前が真っ暗になることもある。お金を稼ぐこと、家族を守ること、星を見ること、たくさんある。しかし、いちばんと言われると難しい。王子さまは、この狐から絆を結ぶことを学び、絆を結ぶ前と後では、全てが異なることを知る。少し前までは、全く同じバラに見えていたにもかかわらず、絆を結んだバラと、そうでないバラでは、もはや同じではないのだ。しかし、絆を結ぶと言われても中々ピンとこない。「絆を結ぶ」ことを、作者は時間をかけること、としている。「これは人それぞれなのでは？」と私は思った。私にとって「絆を結ぶ」は、愛情を注ぐことだ。読んだら一度、絆を結ぶことについて、考えてみて欲しい。そうすれば、王子さまの「地球の人たちって、ひとつの庭園に、五千もバラを植えてるよ……それなのに、さがしているものを見つけられない……」、「だけどそれは、たった一輪のバラや、

ほんの少しの水の中に、あるのかもしれないよね……」という言葉が痛いほど身にしみるだろう。些細と捉えていたことも、大切だと感じるようになり、何気ない今が、少し明るくなるかもしれない。そんな可能性を感じさせてくれる。

作品の全体を通して、イメージがしにくい表現が多いことが、問題のように感じるかもしれない。しかし、なんのことはない。その疑念を、魅力的な挿絵達が解決してくれる。挿絵により、イメージしにくい言葉が、より鮮明で、統一されたイメージへと変貌する。初めに「猛獣を飲み込もうとするボア」の絵が歓迎してくれるだろう。是非とも、心と時間に余裕があるときに、挿絵を見ながら、楽しんで読んでもらいたい。

忘れてはいけない、この作品の魅力の一つとして、河野万里子を書くあとがきがある。日本では、三人の訳者が『星の王子さま』の和訳をしているが、私は河野万里子の訳が一番好きだ。そして、彼女が書くあとがきは、作者であるサン＝テグジュペリの生い立ちや、その当時の時代背景などを、丁寧に、かつ詳しく書いてくれている。これを読めば、疑問に思ったことなどの答えが出るかもしれない。そして、その後に読む本編は最初とは異なるものになるだろう。

最後に、この作品は、特に自分の今の生き方に迷う人に薦めたい。自分と全く異なる考えであっても、知ってみる、考えてみる、という心の余裕が新しい世界へと導いてくれる。大切なのは、自分の心でイメージし、考えることを忘れないということ。この作品を読み、自分で考えることの楽しさを、改めて感じてみてはどうだろうか。

選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 齋藤 敏之

長い間読みつがれ、今も人気のある本についての書評である。この本には、おそらく、作者・サン＝テグジュペリ自身の感受性、幼い時からの経験、迷いなどが複雑に反映されている。書評を読んで本を改めて読み直した時、このような名作を紹介・批評する難しさを改めて感じた。原語でなくても、この本の巧みな日本語訳が瞬く間にサン＝テグジュペリの世界へ導いてくれる。翻訳の巧妙さが光っていることを書評では直接的に表現しているが、工夫が必要。書評の冒頭部分が良かった反面、それに続く文章が少し冗長であった。段落の作り方にも一工夫あれば良かった。書評では引用が少し多い印象を受けたが、逆に、これを書いている学生さんは引用を通して自分の心の中を少し投影しているようにも思えた。作者・サン＝テグジュペリの悩みは深かったのかもしれないが、それは今を生きる私たちの悩みであるかもしれない。書評末尾の誘い方にはとても共感を覚えた。

受賞者から一言



今回、まさかの入賞で、本当に驚いています。私は、文章を書くことが苦手なので、とても良い機会になったと思います。とりあえず、自分の好きな本を薦めたい一心で書きました。今回、書評を書くのが楽しかったので、出来れば次も挑戦したいと思っています。本当にありがとうございました。



佳作

はちけん らいと
八軒 来人



書名：『死神の精度』

著者：伊坂幸太郎

出版社・出版年：文藝春秋，2008

「従来の死神像はもう古い！」

例えば大きな鎌を肩に担いで、黒い布地で全身を覆った動くミイラが居たとする。もしあなたにこれは何ですかと問えば、恐らくあなたはそれを死神と答えるだろう。

しかし、今や東野圭吾らと並んで高校生や大学生から圧倒的な支持を受ける伊坂幸太郎の考える死神は、そんな姿じゃない。彼の考える死神の容姿とは、ヒトそのものだ。もちろん中身は死神のため容姿以外では少し人間離れした部分はあるのだが、見た目だけでは絶対に死神と判断されないその容姿がこの作品における重要な要素の一つとも言える。なぜなら彼ら死神は、人間の姿でなければ仕事が出来ない。

そんな一風変わった死神たちの仕事とは一体何なのか。まず情報部と呼ばれる部署からターゲットの情報を貰い、その都度違った人間の容姿へと変わり彼らは人間の世界へやってくる。しかし死神に与えられたターゲットの調査期間はわずか一週間。その間彼らは自分のターゲットとなった人間の調査を行い、七日目にその人物が死を実行するのに適しているかどうかの報告を行う。もしその人物が死を実行するのに適していると判断すれば「可」を、反対の場合は「見送り」と報告する。「可」と判断された人間は翌日、事故や殺人などに偶然巻き込まれるという形でその人生を終えることとなる。

死神が人間世界ですることと言えばもっぱらターゲットの調査とミュージックを聞くこと。無論、ミュージックを聞くことは死神たちの仕事とは何の関係もないのだが彼らは人間世界でミュージックを聞くことを最大の楽しみとしており、むしろミュージックを聞くために人間世界へやってきているとも言える。他にも死神たちはいくつかの特殊な能力や特徴を持っているので、それがまた本書の世界観を広げる大きな役割を担っていると言えよう。

本書の主人公千葉もそんな死神の一人。やっぱり見た目は普通の人間。やっぱりミュージックをこよなく愛す普通の(?)死神。少し違うところと言えば他の死神よりも調査に熱心で、周りの人間と会話が少し噛み合わないところ。著者の伊坂幸太郎といえど巧みな言い回しをすることで有名だが、本書でもそれが非常に冴えている。特にこの千葉という不思議な死神が主人公になったことで、ますますその才能に拍車がかかっているように感じた。

例えば千葉のことを雨男だという女性に対しては「雪男というのもそれか」と返し、ス

テーキをおいしそうに頬張る男に対しては「死んだ牛はうまいか」と話す。他にも死神特有の能力なども相まって様々な掛け合いが生まれるのだが、それらは本書を読んだからのお楽しみ。話それぞれに謎解き要素も含まれており、さらに一話ずつが短いため読むほうを飽きさせることもないだろう。また伊坂文学の特徴でもある他作品とのリンクもしっかりとされており、他作品を読んだことがある人はニヤリとすること間違いなし。

本書は六つの物語からなる短編集となっており、千葉が出会うそれぞれの物語がオムニバス形式で描かれている。ある男性から名指しでクレーム処理の電話を受け続ける不幸な女、本当の正義を追い求め仲間からはみ出るやくざ、ある秘密を隠し山奥へとやってきた女性、一人の女を思い必死になる男、実の母を刺しながら辛い過去を背負い逃亡する若者、そして最後は千葉を死神だと気付きながらもいくつかの願いをする老女。これらの人間の調査を千葉が黙々とこなしながら、物語は進んでいく。果たして千葉は彼らにどんな決断を下すのか？本書を読めば分かることだが千葉は紀元前からこの死神という仕事を任せられ、思想家など様々な分野の人間の相手をしてきたとある。その割には知らない言葉が多すぎやしないかと少しばかりの疑問は残るのだが、最後の老女との会話は特に興味深く、さらにその老女との対峙でいくつかの物語が繋がる瞬間は唯一無二の爽快感があった。そして千葉が時折見せる冷たくとも美しい言葉に、読者の心は安らぎを覚える。なんだ、色々言いながらも千葉って案外人間が好きなんじゃないか。普段小説をあまり読まない人であっても、こんな千葉との出会いならきっと気に入ってくれるはず。少し会話がおかしくて、けどなんだか憎めない。そんな新たな死神像があなたを待っている。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山 茂樹

かなり強引な出だしで始まるこの書評は、疾走感をもたせて最後まで読ませる。体言止めも有効に用いられ、文章に勢いがある。そして、その速度は、書評対象である伊坂作品にもフィットしている。文章を書きなれた人の知的でプロ的な文章であり、今回のコンテスト屈指のうまい文章といえる。これが本の紹介ないし宣伝のコンテストであれば上位入賞したのではないかと思うのだが、やや評価が分かれたのは、その商売くささが要因となっているのではあるまいか。

わたしは、商業的宣伝文のようであっても、作品の評価（面白さ）が伝えられているのであれば、十分に<書評>たりうると考える。ただ、一般に人は宣伝にだまされることが好きではないので、このような文章の書き方は人に警戒感を抱かせ、損をすることがありうるだろう。『死神の精度』を批判的に評するのは、それこそ文学のプロでなければ困難であって、この書評のように好きな作品を思いきり推奨するのもアリだと思う。

受賞者から一言



この度は私の作品を佳作に選んでいただき誠にありがとうございます。前回は佳作を受賞したとあって今回は優秀賞以上を目標にしていたのですが……。そのため少し悔しい気持ちもありますが、自分の文章能力の低さを知る良い機会にもなりました。来年の応募に向けてもう一度「文章を書く」という作業を見直していきたいと思います。



佳作

藤居 幸広



書名：『沈まぬ太陽（3）御巣鷹山篇』

著者：山崎豊子

出版社・出版年：新潮社，1999

「『沈まぬ太陽：御巣鷹山篇』を読んで感じたこと」

物語は一ページ目から国民航空 123 便のエマージェンシー・コール（緊急通信）により、緊張感が伝わってくる。さらにコックピットと管制塔との緊迫したやりとり。冒頭から手に汗握る場面の連続。読者の心を掴むのには、時間はかからないだろう。

本書は『沈まぬ太陽』全五巻の内の三巻目であり、1985年8月12日に発生した日航ジャンボ機墜落事故をもとにした小説である。この事故では乗員乗客 524 名のうち 520 名が犠牲になった。ただ単に読んでいただけだと犠牲者の数字に驚いてしまうが、そこだけに注目してはいけない。本作品はジャンボ機が墜落するまでの過程、墜落現場の様子などが忠実に再現されている。特にジャンボ機が墜落してからの物語の展開、国民航空と犠牲者の遺族とのやりとりは想像を絶している。「人殺し」、「二人の娘を返せ」。肉親を失った悲しみは遺族にしかわからないが、読んでみると読者も同じ気持ちを持つに違いない。そしてこの場面をより引き立てる人物として、主人公の恩地元がいる。

主人公の恩地元は、労働組合委員長として会社と対立した結果、十年間にわたり海外の僻地をたらいまわしにされ、東京に戻ってからも「閑離職」に追いやられていた。事故後は、大阪のご遺族相談室で遺族のお世話をすることになった。恩地が担当する遺族の方たちは、二人の娘を亡くしたその両親、夫を亡くした未亡人、妻に先だたれて息子夫婦と孫を失った父親であった。私は本書を読むにつれて、恩地の遺族に対する姿勢に感動を受けた。罵声を浴びせられても、ひるむことなくなぜ誠心誠意遺族に接することができるのか。普通なら遺族の言葉に心が折れてしまうであろう。しかしこのようにできるのも今まで会社のために戦い、心の底から会社を愛している恩地だからこそできることだ。

恩地の姿勢に感動しつつも遺族との補償交渉の場面では、改めて家族の存在というものを考えさせられる。ある日突然、自分の前から家族がいなくなる。しかも安全より利益を優先した企業の手によって。これは何にも変えられない耐え難い苦痛であろう。亡くなった時に初めて気づく家族の存在。そして気付いた時には、もう手の届かないところにいる家族。残された遺族は酒に溺れ、補償金を奪われそうになる者もいれば、家族を全員失い、補償金を断ってお遍路さんになった者もいる。彼らにとって家族がいかに大切な存在だったのか、ひしひしと伝わってくる。

他に本書をより一層際立たせてくれる点として、恩地を取り巻く人間模様が挙げられる

であろう。登場人物は国民航空の社員だけにとどまらず、国民航空とつながりのある国会議員、事故の遺族、恩地の家族などたくさんの人物が登場している。さらに国民航空の社員の中でも恩地を嫌うもの、反対に今まで受けてきた彼の処遇に同情するものがある。このようにたくさんの人物が登場することで、悲しみ、怒り、憎しみなどを幅広く表現でき、且つ物語のリアリティさを表現できている。

事故から約 25 年がたち、安全に対する技術が進歩したにもかかわらず今も大きな事故が起きている。2005 年に起きた JR 福知山線脱線事故では 107 名の方が亡くなり、500 人以上の方が負傷した。直接の原因は速度超過によるカーブ進入であるが、この背景には運転士への厳しい日勤教育や過密なダイヤなどが指摘され、企業の都合で引き起こされたと言っても仕方がないだろう。技術進歩によって新たな機械が開発され安全が確保されたとしても、企業が利益を優先し安全の確保を怠れば意味ないであろう。

私は本書を読むにあたって、家族の存在がいかに大切な存在なのか考えさせられた。そして企業にとっては、「安全」ということをもう一度考え直す機会ではないか。本書を読むまで墜落事故のことはまったくと言っていいほど知らなかった。なぜなら私が生まれる前に起こった事故であったからだ。むしろ JR の脱線事故の方が鮮明に記憶に残っている。しかし大勢の命が奪われたことには変わりはなく、このような事故を二度と繰り返してはいけない。もう悲しむ顔は誰も見たくないはずだから。

選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 岡田 憲志

山崎豊子氏の小説は、大学病院を扱った『白い巨塔』から一貫して、銀行、航空会社など社会や人々との関係の深い大組織が、自らの権力と利益の維持・拡大を最優先にした事によって起こす取り返しのつかない社会的な問題を扱っています。この『沈まぬ太陽（3）御巣鷹山篇』も、日本航空の抗争の中で起った世界最悪の航空機事故の背景と事故後の対応を扱っています。ややもすると、事故の悲惨さと遺族の無念さだけに目が向いてしまいがちです。現に私も墜落の情景が生々しく描写されている一、二章を読んでいる間は、1985 年当時、一人の少女が自衛隊員に抱きかかえられてヘリコプターで救出されるテレビ映像に祈るように見入っていた自分をよみがえらせていました。しかし、書評者は事故の悲劇として見るだけでなく、最近起った JR 列車事故がこの日航ジャンボ機事故の延長線上にある安全性の問題だと指摘しています。これが内容の読解力という点では、高い評価を得た理由だと思います。

受賞者から一言

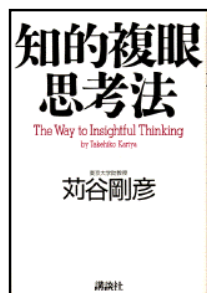


今までの人生でこのような賞をいただいたことがなかったので、正直驚いていますし、素直にうれしいです。悩み、考え抜いた私の書評を読んでいただいて、本書の良さが伝われば幸いです。いただいた賞を糧に来年は、今回の記録を越えられるように頑張ります。



佳作

ふじの しょうへい
藤野 奨平



書名：『知的複眼思考法』

著者：苅谷剛彦

出版社・出版年：講談社，1996

「『思考する』とは？」

世間の常識やステレオタイプに流されず、物事を論理的に考え、かつ自分の意見をはっきり述べるのできる能力。一人の社会人として実に理想的な要素であるが、その習得は決して容易なものではない。なぜなら、問題に対してどういった解決の方法をとれば良いのかが分からないからである。「知的複眼思考法」とは、そんな能力を引き出すためのプロセスを説いたものである。

カテゴリーに分類するならば、本書はいわゆる「自己啓発書」に属するものと思われるが、個人的な自己啓発書のイメージは、実はかなり悪いものであった。このような種類の著作で私が読んできたものには、ビジネスなどで成功した著者自身の主観的な体験談や自慢話がほとんどを占めているものや、芸能人や歌手などが書いた詩のようなものなど、読み手の立場をまるで考えない、自己満足なものばかりであった。したがって、私の中で自己啓発書は、好きな著名人の自尊心に好き好んで付き合わされようとする人に向けた、一種の娯楽のようなものであるという認識しか持ちえていなかったのである。それでも、この本の書評を書こうと思った理由は、この本を先ほどの著作と同類項にまとめるにはあまりに惜しく、つまりはそれほど画期的な内容であったからである。

ここで、本書の概要を述べておく。本書は全四章で構成されており、複眼思考法に至るプロセスを段階的に述べている。第一章では普段から自分に流れてくる情報に対して、ただ単純にその情報を鵜呑みにして受け入れてしまうのではなく、自身の感じた疑問や違和感を掘り起こしていくことを説いている。この「疑ってかかろうとする意識」が、情報を発信する者と対等に接しようとする意志となると、著者は述べている。

さらに第二章では、第一章で挙げられた批判や複数の立場からなる意見が、自分が文章を書くときに投げかけられると想定し、それに基づいて文章力を鍛える。文章としてしっかり意見を書き起こすことで、曖昧なニュアンスを取り除き、洗練された文章を書く能力が養われる。

第三章では前半の二つの章から飛躍し、情報を読み取る段階でその情報の「因果関係」の正誤を明らかにする。著者の述べる主張に存在する因果関係が間違っていた場合、(これを疑似相関という)疑問となっている点を複数の「実態の分かる問い」に置き換え、つまり複眼的に最初の問題を見つめ直すことをテーマとしている。

第四章ではさらに複数の視点を作り出すため、逆説的な影響の予測や、感じた疑問自体に焦点を当て、問題に必要な条件を見出すなどの方法が紹介されている。

以上の要点を踏まえると、この本に対しても例外無く「疑いの目」をかけねばなるまい。私

なりの反論を述べるならば、この思考法はかなり時間がかかる。訓練次第で思考力は上がるのかもしれない。しかし、その域に達するまでにさらに時間を要するのではないだろうか。一般的な社会人にこういった思考法を用いるだけの余裕があるのだろうか、この書評を書いている間にふと思った。私はまだ社会に出ていないので詳しいことは分からないが、この思考法にはまだ改善の余地があるのではと感じた。他にも、様々な視点は思考する人自身の発想力によって限定されてしまうのではないか(つまりは、複眼的な思考にも限界があるのではないか)といった考えが浮かんだ。

私の推論が正しかったとすれば、確かに抜け漏れは評価すべきではない。しかし、同じく本書を踏まえて考えるとこの本自体も一つの主張に過ぎないのであり、この本こそが真の正解ということはないのではないかと、私は思う。

そして、むしろそこよりも、私は本自体の構成に評価の重点を置きたい。著者は本書において、「なるべく一般的に応用可能な形で文章として表現してみることを示したい」と述べている。因果関係に基づいた論理的な説明は見事であり、先ほど述べた概要についても、前半に初歩的な動作から思考法の準備を示し、徐々にハードルを上げていく手法が用いられている。また、各章のいたるところに掲載されている、思考法に関するコラム、それを除いても、説明の合間にも列挙された豊富な事例の量は、言うなれば教科書のように構成された本書を読むと、いかに作者がこの思考法について気を遣って書いたかがうかがわれる。

自分なりに意見を持った人々を相手にすることを思うと、本を書くことは大変なことなのだと感じた。著者と読者が互いに対等に討議するためには、単なる自己満足で終始してはならないのである。

選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 瀬尾 美鈴

本書は、大学の教員である著者が、授業やゼミでの教育実践を通じて、学生たちの思考の乏しさや発想の固さに驚き、学生たちに教えられることは何かを考え、働きかけてきた思いを表現した教育書である。

書評者は、書評を書くには難しいと思われる本書に挑戦し、批判的な眼で評価を与えている。その点が審査員に高く評価された。以下の点に注意すれば、もっと高い評価が得られたでしょう。書評者は、本書の内容を「画期的」であったと述べている。しかしながら、その点についての書評者自身の表現が少し足りない。2段落目の最初の7行を短縮し、それに当てると良かった。それは、読み手にこの本を読もうという気を起こさせるためにも、必要であった。題目と書評者の意図との関係が明確ではない点が残念である。書評者が最も伝えたい事を最終段落の3行に集約すべきであった。『『思考する』とは?』という問いに対する書評者自身の答えを、知りたいと思った。

受賞者から一言



まさか受賞などと思ってもありませんでしたので、通知をいただいた時は本当に驚きました。私が書評大賞に応募したきっかけはゼミの課題によるものでした。もちろん自分で選んだ本ではあったので意欲的に取り組んでいたのですが、こういった専門書のような本をある意味では自力で分析する、今回の書評などはほぼ初めてに等しく、不安だったからです。しかし今は、こうして努力を結果として残せたことを本当に嬉しく思います。書評という一つの客観的な視点からの分析は、大変貴重な経験になりました。本当にありがとうございました。



佳作

まつなが りょう
松永 遼



書名：『告白』

著者：湊かなえ

出版社・出版年：双葉社，2010

「『告白』を読んで」

「愛美は死にました。しかし、事故ではありません。このクラスの生徒に殺されたのです。」冒頭、愛娘を亡くした教師の信じられない告白からこの物語は始まる。物語は全編モノログで構成されており、語り手が「クラスメイト」「加害者」と次第に変化していく。それぞれの登場人物の視点が交錯していく中で事件の真実が次第に浮き彫りになってゆくことになる。一体、事件の真相は何なのか。誰が何を思うのか。読者は息つく暇もなく衝撃のラストへと誘われてゆく。決してハッピーエンドとはいえないその結末は、この小説を読了した読者の心に強烈に焼きつけられるに違いない。

ここでは『告白』という表題から物語について考えてみたい。『告白』の辞書的な意味は次の通りである。「心の中に思っていたことや隠していたことを打ち明けること。また、そのことば。」だが、この小説にはこの定義に当てはまるような完全な告白は存在していない。多くの登場人物はそれぞれの信じる真実を読者に投げかけてくる。教師の愛娘の死というたった一つの事実があるにも関わらず、三者三様の解釈が存在する。そこには絶対的な善も存在しなければ、絶対的な悪も存在しない。あるのは心の奥深くの闇だけである。その中に、一般的にいわれるような正義や倫理観の押し付けは一切ない。逆を言えば、どこまでも素直で人間的といえる。だからこそ読者は強い衝撃を感じる。なぜなら、読者は知らぬ間に加害者、被害者を含めその他大勢の登場人物の告白に不思議と共感を抱いてしまうからである。

彼らの行動や発言は形は違えども個との戦いである。そこには決して頭で考えるような理想のシナリオはない。教師の告白を受け、正義感に突き動かされるクラスメイト。犯人の生徒に対するその行いは客観的に考えれば単なる陰湿ないじめだ。そもそも正義というにはあまりにも稚拙な行いである。だが、彼らの行動に正義という大義名分が加わることでそれは一気に正当化される。誰も疑問を抱かなくなる。それはある意味において計り知れないほどの人間味であふれているといえるかもしれない。ここではクラスメイトという物語の登場人物をとりあげたがその他の人物も同様である。人間は誰しも善だけで構成されている潔白な存在ではない。嫉妬、憎悪。人間の心というものはロジカルに構成されるものとはいえない。本来喜ぶべきことが喜ばなかったり、悲しむべきことを悲しまなかったり。すでにあるべき論で感情を語ろうとしている時点で固定観念に縛られているといわ

ればそれまでだが人間はある程度理性や倫理観で感情をコントロールしている。だが、この小説の登場人物はある意味においてはその枠組みを越えてどこまでも正直だ。自己の充足感を得るためには手段を選ばない。善悪を除いて、それは自己顕示であったり、責任転嫁であったりする。これは多感な時期である思春期の特徴といえるかもしれないが決してそれだけで語りつくすことはできない。生活の上で感じる空虚さ、飢餓感。そうした感情を自己完結させることができない結果といえるかもしれない。

読者が読後に感じるこの感情を文字を通して伝えることは難しい。特定の登場人物に同情を抱くかも知れないし、反対に嫌悪感を抱くかも知れない。それは人それぞれだ。だが、この小説のような事件は実際に起こらないとは言い切れない。昨今の世情を鑑みればご理解いただけるだろう。そうした現状を考えれば、自分自身の身と置き換えて考えることも容易であるに違いない。もし、自分の身内が殺されたら、その現場に居合わせたら。想像力をフルに回転させて一度考えていただきたい。この小説は決してこの世の中に存在する既存の倫理観を押しつける道德書ではない。これを契機に人間の不条理さ、恐ろしさを単に他人ごととしてとらえるのではなく、自分の内にも存在する闇であることを認識することが必要なのではないだろうか。この小説を通して自分の心に巣くうもう一人の自分の告白に耳を傾けてみる必要があるのかもしれない。

選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ工学部教員 岡田 憲志

書評を読んで私が一番読んでみたいと思った本がこの『告白』でした。推理小説ではないのですが、物語の性質上詳しい筋や結末を書く事が出来ません。しかし、書評者はそれをうまく利用し、5名の告白者が語った内容をほとんど書く事なく告白者が考えている事とそれに対する自分の考えを展開しています。この本はどんな内容だろうかと興味を持たせてくれました。

裁判員裁判が始まり「殺人」と「死刑」、「死」を相手にした「罪の重さ」と「罰の量」を秤にかけること、「法律」の理性と「目には目を」の怨念を選ぶのかという重苦しく心にのしかかってくる問題に直接かかわり合うことが義務づけられる事になりました。書評者は、裁判員裁判という言葉こそ使っていませんが、『告白』を読んでこの問題にどう対処すべきかを読者に考えてほしいと言っているように聞こえました。独自の視点という点では、選考委員はこの書評に高い評価を与えています。

受賞者から一言



突然の受賞でたいへん驚いています。はじめての書評へのチャレンジということで苦勞もありましたが、たくさんの方が学べたと思います。これからも時間を見つけて本との出会いを大切にしていきたいと思っています。

この度は、本当にありがとうございました。

第6回書評大賞アンケートから

書評の応募と同時にアンケートにご回答いただきました。ご協力ありがとうございました。これから応募しようと考えている人も参考にしてください。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ・ゼミ等の課題・教員からの推薦
- ・在学中に何かに挑戦してみたいと思ったから。読書が好きなのでこの機会に挑戦してみたいと思いました。
- ・1年生の時から応募し続け、今年で最後なので何としても入賞しようと思ったから。
- ・文章を書くことが不得意なので、チャレンジしようと思ったから。
- ・すばらしい本をより多くの人に知ってもらいたいから。
- ・張りつめた心に風を通し、気持ちに余裕を持てるようになる本を紹介したかったから。
- ・自分の文章がどれだけ評価されるのか試したかったから。
- ・「書評とレポートは違ったもの」ということに興味を持ったから。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- ・興味のある分野だから (35人)
 - ・先生からの推薦・指示 (34人)
 - ・好きな作家だから (17人)
 - ・図書館で見つけたから (16人)
 - ・話題の本だから (9人)
 - ・その他 (7人)
- (その他の内訳)
- ・表紙が素敵だったから
 - ・この本が好きだから
 - ・著者の講演を聴いて興味をもったから



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(76人)(理由)

- ・書評を書く楽しさを覚えました。
- ・自分の文章能力を試してみたい。
- ・日本語表現力が身につくから。
- ・目的をもって本を読むことに意義を感じたから。
- ・賞を取りたいから。
- ・人から薦められた本ではなく、お気に入りの本で書いてみたい。
- ・その本の魅力を発信したいと考えるから。
- ・文章に記すことで一つの話を深く考えられてよかったから。
- ・書くことで自分の考えをまとめることができるから。
- ・作品を読み返して新しい価値に気付けたから。

- ・本を読むことの楽しさを感じたので皆に伝えたいから。
- ・大変だったけれど、書評を書いている間は、本当に、本当に充実した毎日を送っていたから。
- ・入賞すると就職活動に役立つと考えたからです。

「いいえ。」(31人)(理由)

- ・卒業するから。
- ・書評を書くのが難しかったから。
- ・字数を考えながら書くのが本当に大変だったから。
- ・面倒だから。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出時期、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

◆ 感想

- ・文章力をもっと向上させたいと思った。
- ・大変だったけど、やりがいがあった。
- ・読むだけとは違った考えを得ることができました。
- ・あらすじを伝えることと書評のバランスが難しかった。
- ・客観的に書くというのは、難しく困難な作業だった。
- ・自分の思っていることを文章にするのは難しく、本を何度も読み直して自分の考えを整理しながら書きました。でもそれも楽しく達成感のあるものだった。
- ・自分で文章を書くことで、普段何気なく読んでいた文章にかけられている人々の労力を感じた。
- ・ただ感想を書くだけでなく、様々な角度からの意見を思考する必要があることがわかった。
- ・書評を書くためにいろいろ調べるうちにただ読むときとは違ってその作品の新たな一面を発見できたり、楽しく書けた。



◆ 提出方法について

- ・提出の方法が簡単で、応募したい人は誰でも応募できると思った。
- ・提出方法がややこしい。
- ・提出方法は、教学センターなどへの原稿提出に変更してほしい。

Q5) 6月に「書評大賞講演会」が開催されました。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- ・作家の森見登美彦さんを講師として招いてほしい。
- ・泉麻人さんの講演を聴きたいです。
- ・町田康さん
- ・池上彰さん
- ・有名な作家を呼んでほしい。
- ・6月の講演会には参加できないので、秋学期も講演会を開催してほしいです。
- ・演劇の戯曲を書くような人を呼んでいただいただけでありがたかった。次回もお願いします。
- ・より多くの学生が参加でき、何か得るものがあるような講演会にしてほしいです。



第6回京都産業大学図書館書評大賞 統計



1. 学部別応募者数

前回の応募者は77名でしたが、第6回は118名と応募者数が増加しました。その要因の一つは、ゼミの教員の推薦による応募者が増加したことではないかと思われます。応募者の所属学部別では、経営学部は前年と同様にトップを維持し、法学部は大幅に増加し2位となり、前回2位の文化学部は減少し順位をおとしました。総合生命科学部は1名の応募でしたが、その1名が入賞でした。経済学部、外国語学部、理学部、工学部、コンピュータ理工学部、総合生命科学部のみなさん、どうぞ積極的に応募してください。

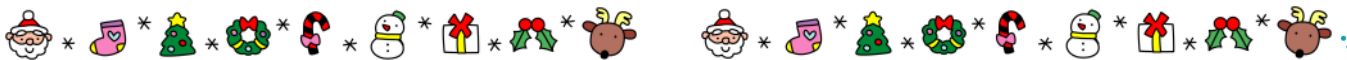
2. 学年別応募者数

第6回の学年別応募者数は2年次生69名、3年次生33名、1年次生11名、4年次生5名の順となりました。1年次生から3年次生までは応募者数を伸ばしており、特に3年次生が4倍弱の増となりました。今回4年次生が減となったことは残念なことです。

対象とする作品を選び、複数の側面からその作品を読み解くことで知識が深まり、感じたこと分析したことを、要約とあわせて文章にすることによって、表現力に幅がうまれます。在学期間中に挑戦してはどうでしょうか。次回は特に、1年次生と4年次生の応募がさらに増えることを期待します。

3. 対象図書分野別冊数

第3回から第5回と同様に「文学」分野図書への書評が最も多く、次に多いのが「社会科学」分野となりました。全体に占める割合は「文学」が49%、「社会科学」が26%となっています。第6回は同一作品への複数の応募がありましたが、ゼミで課題図書として指定されていることが推測されます。また、例年どおり東野圭吾・伊坂幸太郎・重松清・山崎豊子といった人気作家作品、映画やドラマなどで話題となった作品が多く取り上げられました。



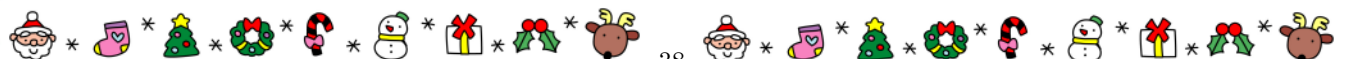
「書評って何？ 書評に親しもう！」

これまでの図書館書評大賞の入賞者は、「書評」を書く前にどんな準備をしたか。「まず、新聞に載る書評を読み、書評とはどういうものかを自分なりに理解してから書いた」、「『週刊読書人』を読んで参考にした」などがその答えです。図書館で書評に親しむ方法がいくつかあります。

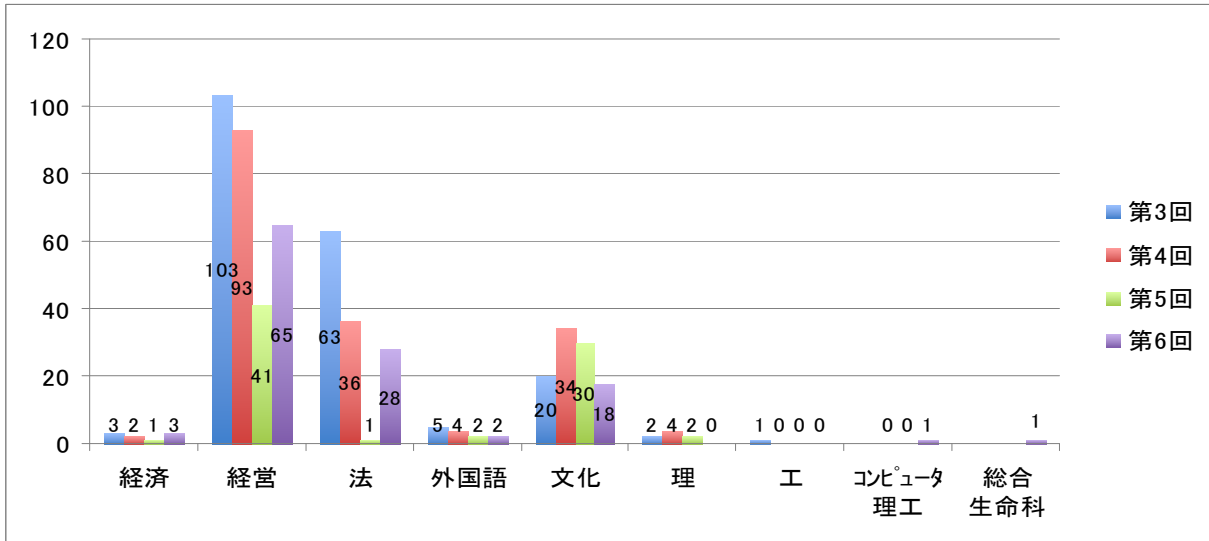
- ① 日曜日の新聞に掲載される書評欄を読む（新聞のオンラインデータベースで「書評」と検索して読むこともできます）。
- ② 雑誌に掲載される書評のページを読む。
- ③ 請求記号019.9（書評・書評集）の書棚に行って、書評集を読む。
- ④ 新聞架にある『週刊読書人』や『図書新聞』を読む。

そのほか、請求記号816.5（文章・論文）の書棚に並んでいる本は、書評を書くときにも役立ちます。『レポート・論文の書き方入門』第3版（慶應義塾大学出版会、2002）の2章は「テキスト批評という練習法」です。また『「知」の方法論：論文トレーニング』（岩波書店、2008）には、文献の読み方（p.113）や、読書カード（p.114）の記載があります。

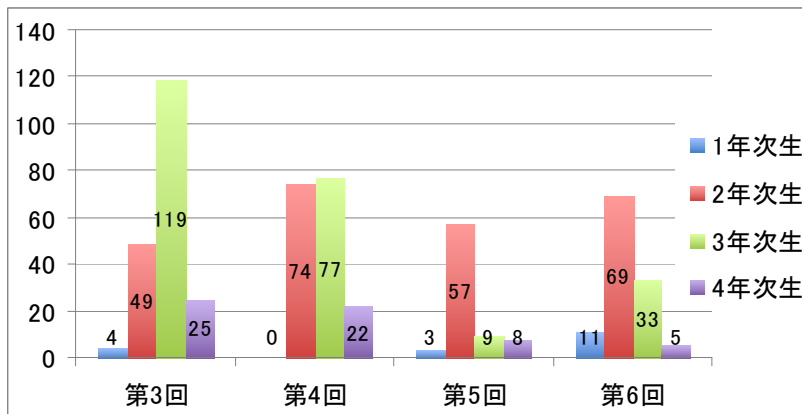
書評に親しむことから始めて、ぜひ次回の書評大賞にチャレンジしてください。



1. 学部別応募者数



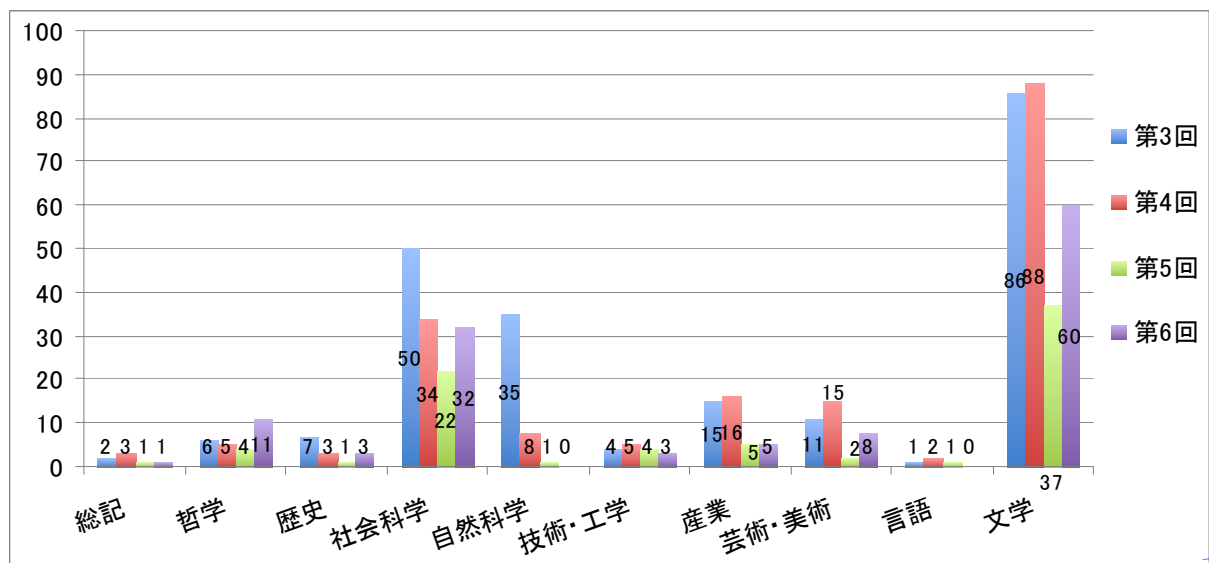
2. 学年別応募者数



※ 1・2の応募者数は複数篇応募の場合、1名としてカウント



3. 対象図書の分野別冊数



※各統計は4年間分を掲載



京都産業大学図書館書評大賞 概要

応募要領（抜粋）

1. 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

2. 応募資格 京都産業大学の学部学生

3. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字以上 2,000 字以内。マイクロソフト社の Word を使用すること。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであること。インターネット等からの無断借用・引用は厳禁。
- (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし受賞は 1 人 1 篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募総数

118名123篇

実施日程

応募期間 平成22年6月1日（火）～9月30日（木）24時

入選発表 平成22年11月30日（火）

表彰式 平成22年12月15日（水）

選考委員より 一言

最近、あまり小説を読んでいませんでした。書評を選考するためにいい本を読む時間を持って感謝しています。書評の多くは体裁も整っていましたが、要約か自分の意見が曖昧なレポートのようなものが少なからずあったのは残念でした。（岡田）

どの書評もすばらしいので、選考するのに正直苦労しました。結局、もとの本がすばらしい書評が高い評価を受けたような気もするので、書評を書く際に、いい本を選ぶのもポイントであると思いました。（小池）

書評は、それを書く人の経験、関心事、考え等が色濃く反映されていることや文章表現力の差で受け止め方に違いが出ることを強く感じました。同時に、自分の言葉で書くことが大切だと思いました。（齋藤）

批評するというには独特のおもしろさがあり、それ自体が創作に等しい表現行為である。さまざまな書評を読ませてもらったが、やはり書き手の思いや人柄がはっきり伝わってくるような書評がおもしろい。（高山）

選考委員によって評価がかなり異なるのが興味深い。よい書評とはどのようなものであるのか、像が統一されていないということだと思われるが、これがよいことなのか悪いことなのか、よくわからない。（中山）

今回は良く書けている作品が多いなあ、という印象があります。これは上手すぎないか？と思い、剽窃などしていないか、選考の過程で十分確認しなければとってしまったくらいです。今後もそれくらい素晴らしい作品を期待します。（天笠）

今回はこれまで3回の選考経験のなかで最も難しく、総じて作品レベルは拮抗していたように思います。ただ、段落の初めは一文字空ける（1行は空けなくてよい）などの書き方の基本には気をつけてください。『Lib.』（v.33,no.1,p.3）には日本語表記や文章の書き方の注意すべき事項が掲載されています。（池田）

応募作品は、みな書き手の感情が如実に表れていました。難しいという感情ではなく、「すばらしい本に出会えた！」という純粋な気持ちで向き合えば、文章も躍動感にあふれ、その本の魅力を伝えることができるのではないかと思います。（今井）

書評を提出するまえに、文字数オーバーをしていないか、誤字がないかを点検してください。また、読み手を意識して、よく伝わるかどうか、表現を見直してみるとよいと思います。（近江）

投稿作品には、著者の表現したいことが詰まっています。それを読み解くことも楽しいことです。「…の書評」「…を読んで」あるいは図書名のみという題名が多く寄せられています。せっかくですので、魅力的な題名をつけてみてはどうでしょうか。（真部）